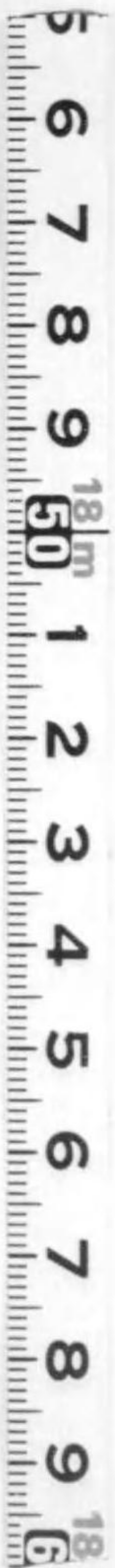


322
456



始





附録 神樂歌催馬樂
謡曲と狂言

大正
15. 2. 4
内交

序

- 一、本書は高等諸學校の國語科講讀の教科書、又は國文學史の參考書として編纂したのであるが、中等諸學校上級の參考書ともなるであらうと思ふ。
- 二、高等諸學校に於て、國語科教授の實施上、この種の文學に、多くの時間を費し難い事を慮つて、本書は簡單を旨としたのである。
- 三、國文學史の參考書としては、神樂歌・催馬樂に關聯して、今様・朗詠をも入るべきであるが、今様は中等學校の教科書や平家物語などにも出で、朗詠は本書の頭註に多く引いてゐるから、これを省いたのである。
- 四、本書に擧げた謠曲及び狂言の選擇については、次の諸點を標準としたのである。
 - 第一、從來、能・狂言中の名作といはれてゐるもの、中で文學趣味の豊富なもの。
 - 第二、能・狂言を見聞した事のない學生達にも理解し易く、且つ興味を覺ゆる

もの。(この點から、能樂の主眼ともいふべき、謂はゆる幽靈能よりも現在物を多く取つたのである。)

第三、成るべく脚色の異つたもの。

一、名作中でも、左の事項に該當するものは割愛したのである。

第一、其の脚色又は語句に於て、教科書としては妥當でないと思はれるもの、

即ち謠曲では松風・千手・杜若・狂言では鎌腹・骨皮の如きもの。

第二、中等學校の教科書中に多く出てゐるもの、即ち謠曲では羽衣・鉢の木・

小袖曾我、狂言では薩摩守・櫻諍の如きもの。

一、頭註は教授の妨げとならぬ範圍で、學生達の豫習の便をはかるのを目的としたのであるから、解釋を大體にこめておいた。

一、頭註に用ひた参考書の主要なものは、

佛教辭林(佛)、神祇辭典(神)、大日本地名辭書(地)、謠曲通解(謠)、有職故實辭典(有)、梁塵愚抄(抄)、神樂考・催馬樂考(考)、神樂入文・催馬樂譜入

文(入文)

である。尙、参考書を引いたものは、誤解を避けるために、成るべく本文のまゝを記しておいた。

一、謠曲の本文は大體、觀世流改定謠本に、狂言の本文は大體、狂言全集の大藏本に、神樂歌・催馬樂の本文は神樂歌入文・催馬樂譜入文に據つたのである。

一、謠曲・狂言ともに、謠ひ即ち曲節を附けて謠ふ部分には『を、詞或は語り、と稱せられてゐる部分には「」を符號として用ひた。

一、本文の句讀點は、謠ひ又は語りの上に重きを置いたのであるが、語法上から斟酌したところもある。

一、謠曲の本文に地とあるのは、地謠の略である。能舞臺の、向つて右側に、數人一列又は二列に坐つて、シテ・ワキ等の詞、及び謠ふ部分以外の謠ひを謠ふのをいふのである。その人々の中で、後列の中央に、全員を統括する者が坐るのを常とし、これを地頭といふ。

一、次第・一聲・道行・歌・サシ・クセ・ロンギ等は謠ひ方の名で、文章の上には関係のないことではあるが、参考までに記しておいた。

一、謡曲・狂言に解題及び出典を、神樂歌・催馬樂に説明を附記したのは、豫習者の便をはかつたのである。

一、能・狂言の役者の役割を簡単に説明しておかう。

仕手 能・狂言一番の中の主人公たるもの。一曲中に二度出る時は、前のを前仕手、後のを後仕手といふ。

脇 仕手の相手となるものをいふ。脇は一名アドともいふ。古語に話す人の心を知つて應答すること、即ち相槌をうつことをあじうつといふから出た詞で、多く狂言の方に用ひられてゐるやうである。

連 仕手に附屬してゐる助役を仕手連、略して連ともいひ、脇に附屬してゐるのを脇連又は連脇といふ。又、仕手連でも脇連でも、太刀持などの如き従者に出る役を伴といふ。

子方 是には三種類ある。即ち、櫻川の櫻子の如く、もごより小供として作られたものであるから子方を用ふるもの。又、安宅の義經の如く、そのものに對して、深く哀れを感じしめ、或はそのものを神聖にするために子方を用ふるもの（花筐の帝王の如き）。又、或時は大人を用ひ、

或時は子方を用ふるもの（竹生島の天女の如き）。

間 狂言方の役で、能の間を連続させる所から起つた名である。狂言師の役であるから、狂言ともいひ、又、チカシともいふ。

一、能には種々の作があるが、先づこれを、一日五番と立て、凡そ五種類に分つことができる。

其の一番は脇能と云つて、特に脇の役を重きに置いたものであるが、今は脇の如何に係らず初番の能をいふ名稱となつた。脇能にするものは神能と云つて、高砂のやうな神祇の事を作つたものである。

其の二番目には修羅物と云つて、武將・武士などの幽霊が出て、合戦の昔話を

する事を仕組んだもので、忠度などの類である。
 其の三番目には鬘物かづらものと云つて、高尚優美な女が、仕手となるものをいふ。熊野の如きはそれである。
 其の四番目には、人情的に面白う感ずべきものを用ふる。安宅の如きはその一例である。また、狂女物きやうにょものと云つて、物狂ものぐるの筋を仕組んだ櫻川の如きものもこれに入れる。
 其の五番目には、鬼事・天狗事か、祝言物、または賑はしく花やかな能を用ふる。(安達原・鞍馬天狗などの類)
 一、能舞臺に關しては、挿畫及び説明を本文狂言の終りに入れておいた。

大正十四年八月

編者 しろす

謠曲と狂言 附録 神樂歌催馬樂

目次

高砂	一	謠曲五種	頁
忠度	一四		
熊野	二四		
安宅	三九		
櫻川	六〇		
狂言三種			
井碕	七五		

目次

一

子盗人……………六八
 針立雷……………九九

附 録

神樂歌催馬樂

神樂歌……………二四
 催馬樂……………三三

挿 畫

謡曲櫻川……………一
 狂言針立雷……………五
 能舞臺の圖……………二三

(目次終)



川 櫻 曲 話

謠曲と狂言

大林徳太郎 編

謠曲五種

高砂

解題 阿蘇の神主が、高砂の浦で、相生の松の精に逢ひ、又、住吉に来て、住吉明神の來現を拜することを作つたものである。國土安穩・夫婦和合等の意を述べた、めでたい謠であるから、江戸時代には、柳營の謠初の式にも、先づ此の曲の四海波の章を謠はせ、其の外、種々の祝言にも、これを用ふることゝなつてゐたのである。

出典 古今和歌集の假名序に、



高砂

高砂・住の江の松も相生のやうにおぼえ、
とあり、又、伊勢物語に、

昔帝、住吉に行幸し給ひけり。

我れ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松幾代経ぬらむ

御神現れ給ひて、

むつまじと君は知らずや瑞籬の久しき世よりいはひそめてき
とあるのによつたものである。

人物

前ジテ 尉(松の精)

前ヅレ 姫(松の精)

後ジテ 住吉明神

ワキ 神官友成

ワキツレ 従者(二人或は四人)

ワキ、ワキツレ 『今をはじめの旅衣、今をはじめの旅衣、日もゆく
末ぞ久しき。』

ワキ 『抑もこれは九州肥後の國、阿蘇の宮の神主友成とほわ

高砂
播磨の國加古郡にある。

尾上の鐘
高砂の尾上寺の鐘、高砂の尾上の鐘の音なり曉かけて霜や置くらむ(千載集、前中納言匡房、尾上の寺今詳ならず。高砂は平夷の砂濱にして、尾上と呼ぶべき丘陵のあるを見ず。)(地)
誰みかも
誰みかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに(古今集、藤原興風)

高砂

が事なり。われ未だ都を見ず候ほごに、此度思ひたち都に上り候。又よきついでなれば、播州高砂の浦をも一見せばやこ存じ候。』

道行 『旅衣、末はるばるの都路を、末はるばるの都路を、けふ思ひ立つ浦の波、舟路のどけき春風の、幾日来ぬらん跡末も、いさ白雲のはるばるこ、さしも思ひし播磨瀉、高砂の浦に著きにけり、高砂の浦に著きにけり。』

シテ、ツレ 『高砂の松の春風吹き暮れて、尾上の鐘も響くなり。』

ツレ 『波は霞の磯がくれ、』

シテ、ツレ 『音こそ潮の満干なれ。』

シテ 『たれをかも知る人にせん高砂の、松も昔の友ならで、過ぎこし世々はしら雪の、積り積りて老いの鶴の、ねぐらに残る有明の、春の霜夜の起き居にも、松風をのみ聞き馴れて、』

いつまでか
「いつまでかは、いつまでもとする方
然るべしと、古來説あり。祝の主意に
は、さもあるべし。老を嘆く方よりす
れば、やはり、いつまでかの方を捨て
がたし。」(通)

生の松
筑前の國早良郡にある。續風土記に「生
松原は白沙清潔にして、風景勝れ、他
國には又類もなき佳景なり。」

住の江
住吉の古名。攝津住吉郡にある。
相生
相道・相老など諸説あるが、相生を取

心を友と菅筵の、思ひを逃ぶるばかりなり。『音づれば松に
ここ問ふ浦風の、おち葉衣の袖そへて、木陰の塵を搔かうよ、
木陰の塵を搔かうよ。』處は高砂の、處は高砂の尾上の松も
年ふりて、老いの波もよりくるや、木の下陰の落葉かくなる
まで命ながらへて、猶いつまでか生の松、それも久しき名所
かな、それも久しき名所かな。
『里人を相待つ所に、老人夫婦來れり。 いかんこれな
る老人に尋ねべき事の候。』

シテ「こなたの事にて候ふか。何事にて候ふぞ。」

ワキ「高砂の松とはいづれの木を申し候ふぞ。」

シテ「只今木陰を清め候ふこそ高砂の松にて候へ。」

ワキ「高砂・住の江の松に相生の名あり。當所と住吉とは國
を隔てたるに、何ぞて相生の松とは申し候ふぞ。」

つた。古今和歌集評釋に「己が老いた
る心より、松の老いたるをも、昔の友
に擬へられて、われと同じ齡の程にや
と思はるゝ意とす。」
姥
又廻。老いたる女。

シテ「仰せの如く古今の序に、高砂・住の江の松も相生のや
うに覚えごあり。さりながら、此の尉は津の國住吉のもの、
これなる姥こそ當所の人なれ。知る事あらば申させ給へ。」
ワキ「ふしぎや見れば老人の、夫婦一所にありながら、遠き
住の江・高砂の、浦山國を隔てて住むご、いふはいかなる事
やらん。」

ツレ「うたての仰せ候ふや。山川萬里を隔つれども、互に通
ふ心づかひの、妹脊の道は遠からず。」

シテ「まづ案じても御覽ぜよ。」

シテツレ「高砂・住の江の、松は非情のものだにも、相生の名
はあるぞかし。ましてや生ある人として、年久しくも住吉よ
り、通ひ馴れたる尉と姥は、松もろこもに此の年まで、相生
の夫婦となるものを。」

ワキ「いはれを聞けば面白や。さてさて先きに聞えつる、相生の松の物語を、所に言ひ置くいはれはなきか。」

シテ「昔の人の申し、は、これはめでたき世のためしなり。」

ツレ「高砂といふは上代の、萬葉集の古への義。」

シテ「住吉と申すは、今此の御代に住み給ふ延喜の御事。」

ツレ「松は盡きぬ言の葉の、」

シテ「榮えは古今同じじ、」

シテツレ「御代をあがむる喩へなり。」

ワキ「よくよく聞けばありがたや、今こそ不審はるの日の、」

シテ「光り和らぐ西の海の、」

ワキ「かしこは住の江、」

シテ「こゝは高砂、」

ワキ「松も色添ひ、」

高砂といふは云々

難解の句、上代とは、延喜に對して、

奈良の朝をさす。古への義とは此の萬

葉集撰ばれたる古への聖代を、高砂に

比したる義ぞとなり。(通)

住吉と申すは云々

これも解し難い。住吉は、今の延喜の

御代を比したる義ぞとなり。(通)

古今同じ

「上の上代と今此の御代とに應ず。(通)

西の海の

西の海やあなさが原の汐路よりあらは

れ出でし住吉の神(續古今集、卜部兼

直)

シテ「春も、」

ワキ「のどかに、」

地歌「四海波静かにて、國も治まる時つ風、枝を鳴らさぬ御

代なれや、逢ひに相生の、松こそめでたかりけれ。げにや仰

ぎても、言もおろかや斯かる世に、住める民にて豊かなる、

君の恵みぞありがたき、君の恵みぞありがたき。

ワキ「なほなほ高砂の松のめでたきいはれ、くはしく御物語

候へ。」

地「それ草木心なしは申せども、花實の時をたがへず、

陽春の徳を備へて、南枝花始めて開く。」

シテ「然れども此の松は、そのけしきとこしなへにして、花

葉時を分かず。」

地「四つの時至りても、一千年の色雪の内に深く、又は松

時つ風

時節に順應して吹く風。

枝を鳴らさぬ御代

太平の世。五日一風十日一雨、風不鳴

枝雨不破塊(王充論衡)

南枝花始めて開く、

誰言春色從東到。嘉慶南枝花始開。(和

漢朗詩集、菅原文時)

一千年の色

高砂

十八公葉霜後露、一千年色雪中深。(和漢朗詠集、源順)
松花の色十かへり
椿葉之影再改、露獨南面、松花之色十廻、豈唯天意乎。(本朝文粹、大江朝綱)

生きとし生けるもの毎に
花に鳴く鶯、水に住む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、何れか歌をよまざりける。(古今集序)

長能

藤原長能。圓融、華山、一條の三朝に歴仕して、從五位上伊賀守となる。拾遺、後拾遺、詞華、千載、新古今等の諸集に作歌が出てゐる歌道に於て、藤原道信、藤原實方、源道濟等と並び稱せられてゐた。歌道に關する著書には長能私記といふのがある。

有常非常のその聲云々
「和歌は是五行の體也。詞に出すを歌とし、心にしれるを體とす。春の林の東風に動き、秋の露の北露に鳴くも、皆和歌の體にもれず、有情無情共に歌の道をおこす也。云々。(長能私記)

十八公
松の字體が、十八公の三字から成つてゐるので、松の事をいふ。「丁固夢松樹生其腹上人謂曰、松字十八公也。」

花の色十かへりとも云へり。

シテ『かゝるたよりを松が枝の、

地『言の葉草の露の玉、心を磨く種となりて、

シテ『生きとし生けるもの毎に、

地『敷島のかげによるごかや。然るに長能が言葉にも、

有情非情のその聲、皆歌にもるゝことなし。草木土砂・風聲水音まで、萬物のこもる心あり。春の林の東風に動き、秋の蟲の北露に鳴くも、皆和歌の姿ならずや。中にも此の松は、萬木に勝れて、十八公の粧ひ、千秋の緑をなして、古今の色を見ず。始皇の御爵に、あづかる程の木なりとて、異國にも本朝にも、萬民これを賞翫す。

シテ『高砂の、尾上の鐘の音すなり。

地『暁かけて、霜は置けごも松が枝の、葉色は同じ深緑、

十八年其爲公平。遂如夢。(吳錄)
始皇の御爵にあづかる。

奏始皇上封泰山、逢疾風暴雨、賴得抱松樹、因封其樹爲五大夫。(漢官儀)

松の葉の散り失せずして云々
青柳の絲絶えず、松の葉の散り失せずして、まさきのかづら長く傳はり、(古今集序)

立ちよる陰の朝夕に、かけごも落葉の盡きせぬは、まことな
り松の葉の散り失せずして色はなほ、眞柝のかづら長き世の、
たごへなりける常磐木の、中にも名は高砂の、末代のためし
にも、相生の松ぞめでたき。地『げに名を得たる松が枝の、
げに名を得たる松が枝の、老木の昔あらはして、その名をな
のり給へや。

シテ『今は何をかつゝむべき。これは高砂・住の江の、相
生の松の精、夫婦と現じ來りたり。

地『ふしぎや偕は名ごころの、松の奇特をあらはして、

シテ『草木心なれごも、

地『かしこき世とて、

シテ『草も木も、

地『わが大君の國なれば、いつまでも君が代に、住吉にま

間狂言

狂言には、獨立した狂言と間狂言との二種がある。後者は、能で、前仕手が樂屋に入つて、後仕手の裝束に改める間に演じる狂言である。本文は間狂言とあるのは、間狂言を演ずるものをいふ。

鳴尾

攝津の國武庫郡にある。鳴尾浦は武庫海に屬し、大阪港境界の西を指す。即、今津・西宮の澳なり。(地)

づびきて、あれにて待ち申さんご、ゆふ波の汀なる、海人の小舟にうち乗りて、追風にまかせつゝ、沖の方に出でにけりや、沖の方に出でにけり。

中入。間狂言(當浦の者)。ワキが呼び出すと、舞臺に坐り、高砂の松のめでたいわけや、高砂・住の江の松を相生といふことなどを述べる。ワキは、先き程、老人夫婦が来て、今の物語をなし、小舟に乗つて、沖の方に出たことをいふ。これに對して間狂言は「これは奇特の事なり。さては、當社と住吉の明神とが、權りに現はれ給ひたると推量申せば、早々住吉に參詣あれかし。某榊取となりて、御供申さん。」というて退場すると、ワキとワキヅレとが立ち竝んで、待詔をうたふ。

ツレ「高砂や此の浦舟に帆をあげて、此の浦舟に帆をあげて、月もろごもに出でしほの、波の淡路の島陰や、遠く鳴尾の沖過ぎて、はや住の江に著きにけり、はや住の江に著きにけり。
後テ「われ見ても久しくなりぬ住吉の、岸の姫松幾代經ぬら

あなざが原

穂が原。伊弉諾尊が、黄泉からの歸途に禊祓せられた處。穂については、柏・萩・青木・ミンヘギ・梓の一種などの諸説がある。地理上の考證については、筑前の香椎濱、同國芥子屋大門、同國鹽縣、又は日向の大淀川の北岸橋郷など、未だ確定してゐない。さて、攝津の住吉神社の祭神については、神祇辭典に「祭神四座。底筒男ノ命・中筒男ノ命・表筒男ノ命・息長帶姫ノ命(神功皇后)を祀る。」とある。又、底筒男ノ命・中筒男ノ命・表筒男ノ命が、禊祓の時に現れ給うた事は、古事記に見えてゐる。

浅香湯

和泉の國泉北郡にありし地名。「浅香」浦は、後世地形變じ、今此の名なし。蓋堺北莊の西なる三寶村の地。古は海灣に屬す。浅香浦此に外ならず。(地)
玉藻刈る
夕されば沙滿ら來なる住の江の浅香の浦に玉藻刈りてな(萬葉集、思紀皇女)
松根によつて云々
倚松根而摩腰、千年之翠滿手。折梅花

高砂

ん。睦しご君は知らずや瑞垣の、久しき代々の神かぐら、夜の鼓の拍子を揃へて、すゞしめ給へ宮つこたち。

地「西の海、あをざが原の浪間より、

シテ「あらはれ出でし神松の、春なれや、殘んの雪の浅香湯、

地「玉藻刈るなる岸陰の、

シテ「松根によつて腰をすれば、

地「千年の緑手に滿てり。

シテ「梅花を折つて頭にさせば、

地「二月の雪ころもに落つ。

神舞

ロンギ地「ありがたの影向や、ありがたの影向や。月すみよしの神遊、御影を拜むあらたさよ。

シテ「げにさまざまの舞姫の、聲も澄むなり住の江の、松影

而挿首、二月之雪落衣、新蓋吾朝之風俗、子日之嘉會也。(本朝文粹、橋在列)

影向

「えがう」とも讀む。神佛の本體が、一時應現すること。

青海波

「舞樂の名。もとは天竺樂なり。仁明天皇の時「或は嵯峨天皇ともいふ」。詔によりて、和爾部大田麿、樂を作り、其安世舞を作り、小野篁詠を作りしといふ。中世以來、堂上公達の舞ふ例とす。」(有)

この曲を舞ふ人は、波の模様を染めた服を用ひる。盤漣調の樂。

還城樂

「舞樂の名。一に見蛇樂ともいふ。蓋し西國の人、好んで蛇を食し、求めて之を得るや、喜悅の狀説くべからず。其の體に模して、此の舞を作るといふ。又一説に、唐玄宗、章后を誅して、京師に還り此の曲を作る。故に還城樂と稱すといふ。(有)本文は、都に還る意に取る。太食調の樂。

萬歳

祝すべき、又はめでたきといふ程の意。

小忌衣

もうつるなる、青海波とはこれやらん。

地『神と君との道すぐに、都の春にゆくべくは、

シテ『それぞ還城樂の舞、

地『さて萬歳の、

シテ『小忌衣、

地『さすかひなには悪魔を拂ひ、をさむる手には壽福を抱

き、千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命を延ぶ。相生の松風、

颯々の聲ぞたのしむ、颯々の聲ぞたのしむ。

「小忌とは嚴齋する者の服なるより云ふ也。御代始抄に、小忌といふは神事の衣服なり。白き布を張りて山藍といふ草にて、型木を摺れるもの也。大かた狩衣の如し。赤紐とて、紗をたひみて、あはみむすびをして、泥繪などかきて、右の肩に二筋とちかくる事なり。云々。(服制の研究)

共、舞の手の名。

千秋樂

「雅樂の曲名。後三條天皇の大嘗會に、風俗所預源賴能に勅して、之を作らしむといふ。唐書に云ふ開元中、八月五日を以て千秋節と爲し、天皇譚樂すと。蓋し千秋樂の起る所なるか。」(有)盤漣調の樂。

萬歳樂

「舞樂の名。隋樂にして、一名、煬帝萬歳樂と稱す。隋の煬帝、大樂令明達をして作らしめたる曲とぞ。此の樂は、行幸、船中、賀儀等に、之を奏す。(有)平調の樂。

歌ふべき所と語るべき所

諸曲には、歌ふべき所と、單に語るべき所、即ち對話、もしくは獨語ともいふべき所とがある。元來この二要素が別れたのは、既に平家物語や源平盛衰記などにも、處々に見えてゐるやうであるが、諸曲に至つては、殊に著しい區別を生じてきたのである。歌ふべき所には、古歌や、故事や、古語、又は古句を、多く引用してゐる。語るべき所には、比較的によく、俗談・平語を用ひてゐる。さてこの二要素は、元曲に擬して成つたものだといふのが、今日の定論である。

忠 度

解題

平ノ忠度の亡霊が、藤原俊成の家臣に、自己の詠が千載集には入れられたが「讀人知らず」と書かれてゐる事を、口惜く思ふ由を述べ、且つ、自己が戦死の模様を物語る、謂はゆる幽霊能である。前段は悲痛、後段は壯烈、しかも優雅な文章である。

出典

平家物語卷七「忠度の都落の事」の文末に、

その身勅勤の人なれば、名字をばあらはされず、故郷の花といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ「よみ人知らず」と入れられける

さよなみや志賀の都はあれにしをむかしながらの山櫻かな

その身朝敵となりぬる上は、仔細に及ばずといひながら、うらめしかりし事どもなり。

とある。又、源平盛衰記にも、同意の文が出てゐる。

人物

前ジテ 老樵夫

後ジテ 平忠度の靈

ワキ 僧

ワキ 『花をも憂しと捨つる身の、花をも憂しと捨つる身の、月にも雲はいこほじ。』これは俊成の御内にありし者にて候。さても俊成亡くなり給ひて後、かやうの姿となりて候。又西國を見ず候程に、この度思ひ立ち西國行脚ここ、ろざし候。

サシ 『城南の離宮に赴き、都を隔つる山崎や、關戸の宿は名のみして、泊りも果てぬ旅の習ひ、憂き身はいつも交はりの、塵の浮世の芥川、猪名の小笹を分け過ぎて、月も宿かる昆陽の池、水底清く澄みなして、蘆の葉分の風の音、聞かじとするに憂き事の、捨つる身までも有馬山、隠れかねたる世の中、憂きに心はあだ夢の、覺むる枕に鐘遠き、難波はあこに鳴尾瀉、沖浪遠き小舟かな。

かやうの姿
僧形

城南の離宮

「白河天皇應徳三年の創營、鳥羽天皇増修し、一に城南離宮と名づく。此の地、西南神(眞經寺社)あるを以て也。」(地)都を隔つる山崎
山城の國乙訓郡にある。山崎は、攝津の方へ行く、山城のはづれの地であるから、山が都の空を隔てる意に掛けて云うたのである。

關戸の宿

「山城の國乙訓郡大山崎の西に關戸町の字あり。關戸神社と稱する叢祠あり。是關趾ならん。名勝志云、此地山城國南界、而有關、又有官舎、號關外院、後

芥川 世指其舊跡名關戸、古則戒非常。(地) 攝津三島郡にある。川の名にも村の名にもある。

猪名の小笹 又爲奈とも書く。猪名野は、猪名川兩岸の總名で、豊野・河邊の二郡に亘つてゐる。おなの笹原、おなの小笹などと古歌に詠まれた笹の名所。

見陽の池 攝津の國河邊郡稻野村にあつて、行基法師が造つたのだといはれてゐる。

有馬山 攝津の國有馬郡。「此の名は郡中の總稱なれば、何處と限定し難し。攝津志湯山に擬するは非なり。又、古歌を按ずるに、有馬山は猪名野に詠み合はす。即ち、猪名野に面へる羽束山・名鹽山・生瀬山・船坂山など、六甲山の北に接續する嶺を曰ふ者の如し。」(地) 有馬山の右は「憂き事の有り」にいひ掛け、山は「山に隠れ」の意にいひ掛けたのである。

鳴尾海 高砂の頭註参照。(一〇頁) 前記すま 前の失敗に懲りもせず再びする事。

サシ「げに世を渡る習ひにて、かく憂き業にもこりずまの、汲まぬ時だに鹽木を運べば、乾せどもひまはなれ衣の、浦山かけて須磨の海、海人の呼び聲ひまなきに、しば鳴く千鳥音ぞ遠き。抑も此の須磨の浦と申すは、淋しき故に其の名を得る。わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に、藻鹽垂れつ、わぶご答へよ。げにやいざりの海人小舟、藻鹽の煙松の風、いづれか淋しからずと云ふ事なき。」又此の須磨の山陰に一本の櫻の候。これは或人の亡き跡のしるしの木なり。『珠更時しも春の花、手向の爲に逆縁ながら、足引の山より歸るをりごごに、薪に花を折り添へて、手向をなして歸らん、手向をなして歸らん。』

ワキ「如何にこれなる老人。おこしは此の山賤にてましますか。」

しやうこりもなきこと。「ま」は助字で

何の意味もない。

淋しき故に其の名を得る

淋しいので有名になつてゐる。

わくらはに問ふ人あらば

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻

鹽垂れつ、わぶと答へよ(古今集、在

原行平)

逆縁

佛教辭林に「逆縁の因縁なり。或は病

患を受け、或は妻子に別る、等、總へ

て逆縁のことよりして、佛法に近づく

ゆかりをいふ」とある。それから轉じ

て、蕪參の目的でなく、他の事のついでに、

香華を手向けるのをいふ。諸

曲では、多く後の意味に用ひられてゐる。こゝもそれである。

シテ「さん候。此の浦の海人にて候。」

ワキ「海人ならば浦にこそ住むべきに、山ある方に通はんを

ば、山人とこそいふべけれ。」

シテ「そも蜚人の汲む潮をば、焼かで其のま、置き候べきか。」

ワキ「げに、これは理りなり。藻鹽たくなる夕煙。」

シテ「絶間を遅しと鹽木とる。」

ワキ「道こそかはれ里ばなれの、」

シテ「人音稀に須磨の浦、」

ワキ「近き後の山里に、」

シテ「柴といふもの、候へば、」

ワキ「柴といふもの、候へば、鹽木のために通ひくる。」

シテ「餘りに愚なる、お僧の御誼かなやな。」

地「げにや須磨の浦、餘の所にや變るらん。夫れ花につらき

須磨の若木の櫻

「須磨寺の門前にありし名木。暗に忠度を櫻に比し、敵兵を浦風に比して、もろく散りたるを歎く意を含む。」(通解)

は、嶺の嵐や山おろしの、音をこそ厭ひしに、須磨の若木の櫻は、海少しだにも隔てねば、通ふ浦風に山の櫻も散るものを。
ワキ「いかに尉殿、はや日の暮れて候へば、一夜の宿を御かし候へ。」

シテ「うたてやな、此の花の陰ほごのお宿の候べきか。」

ワキ「げに〜これは花の宿なれども、さりながら、誰を主と定むべき。」

シテ「行き暮れて木の下陰を宿とせば、花や今宵の主ならましと、」
「詠めし人は此の苔の下。痛はしや、われらがやうなる海人だにも、常は立ち寄り弔ひ申すに、お僧達は、など逆縁ながら弔ひ給はぬ。おろかにまします人々かな。」

ワキ「行き暮れて木の下陰を宿とせば、花や今宵の主ならましと、」
「詠めし人は薩摩の守。」

行き暮れて

行き暮れて木の下陰を宿とせば花や今宵の主ならまし(平家物語、平忠度)

値遇
出合ふ事。

忠度

唯法に云ひかけた語。

花の臺に坐し給へ

極樂往生し給へといふ義。花の臺は、極樂にあるといふ蓮臺を指す。

佛果

佛となるべき結果。佛となるべき諸の因を修して得たる證果なり。(佛)

シテ「忠度と申し、人は、此の一の谷の合戦に討たれぬ。ゆかりの人の植ゑ置きたる、しるしの木にて候なり。」

ワキ「こはそも不思議の値遇の縁。さしもさばかり俊成の、

シテ「和歌の友とて淺からぬ、

ワキ「宿は今宵の、

シテ「主の人。」

地「名も忠度の聲き、て、花の臺に坐し給へ。」

シテ「ありがたや、今よりは、かく弔ひの聲聞きて、佛果を得んぞ嬉しき。」

地「不思議や、今の老人の、手向の聲を身に受けて、喜ぶ氣色見えたるは、何の故にてあるやらん。」

シテ「お僧に弔はれ申さんにて、これまで來れりこ、

地「夕べの花の陰にねて、夢の告げをも待ち給へ。都へ言つ

かげろふの
通解には「月のかげ事。吉野にかげろふの小野といふ地名あればおのづかに云ひかけたり」とある。但「小」は假名が違ふ。「雲かゝる夕日は空にかげろふの小野の浅茅生風ぞ涼し」新拾遺集、入道二品新王覺譽

迷ふ雨夜の物語

「雨夜は暗くて、道ふみ迷ふものなれば、魂の迷ふ意より云ひかけたり。雨夜の物語とは、源氏物語中に名高き古事なれば、たゞ物語の事に用ふ。雨の字、こゝには必要ならず。」(通解)
「堪忍と譯す。吾人が住する、この三千大千世界の總稱なり。これを堪忍となづくる所以は、この世界の生類、忍

て申さんごて、花の陰に宿り木の、行く方知らずなりにけり、行く方知らずなりにけり。

「まづ〜都に歸りつ、」『定家にこの事申さんご、
夕月早くかげろふの、夕月早くかげろふの、おのが友呼ぶ群千鳥の、跡見えぬ磯山の、夜の花に旅寝して、浦風までも心して、春に聞けばや音すごき、須磨の關屋の旅寝かな、須磨の關屋の旅寝かな。

「恥づかしや亡き跡に、姿を返す夢のうち、覺むる心は古へに、迷ふ雨夜の物語、申さんために魂魄に、移り變りて來りたり。さなきだに、妄執多き娑婆なるに、何なか〜の千載集の、歌の品には入りたれども、勅勘の身の悲しさは、讀人知らずと書かれし事、妄執のなかの第一なり。されどもそれを撰じ給ひし、俊成さへ空しくなり給へば、御身は御内

んで十惡に墮へ、敢て、この土を出離せんことを欲せざるによる。」(佛)
歌の品には入りたれど
忠度の「さ、波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」の詠が、千載集に入れられたことをいふ。

忘執

「凡夫の徒らに妄想を執つて捨つること能はざるをいふ。」又「妄想とは、虚妄の思想といふ義にして、顛倒虚偽の念をいふ。」(佛)

今の定家君
今の主人公たる定家卿の意。定家は俊成の子。

心の花か

美しい心を花に譬へていふ語。

蘭菊の狐川

白氏文集に、狐藏蘭菊と云ふ句があるから「蘭菊の」を狐の形容詞的修飾語に用ひたのである。狐川は、中世狐川大渡といふは、八幡山崎の間、河道の變に隨ひ、何處と推し難し。狐の稱は、變化に比喩したる者にや。(地)歌の望みを歎きしに
千載集に自己の歌の入れられるやう歎願したのをいふ。
源氏の住所
光る源氏の君の住居せられてゐた處。

にありし人なれば、今の定家君に申し、然るべくは、作者をつけてたび給へと、夢物語申すに、須磨の浦風も心せよ。

「げにや和歌の家に生れ、その道をたしなみ、敷島のかげに寄つし事、人倫に於て専らなり。」

「中にも此の忠度は、文武二道を受け給ひて、世上に眼高し。」

「そも〜後白河の院の御宇に、千載集を撰ばる。五條の三位俊成の卿、承つてこれを撰ず。年は壽永の秋の頃、都を出でし時なれば、さも忙はしかりし身の、心の花か蘭菊の、狐川より引き返し、俊成の家に行き、歌の望みを歎きしに、望み足りぬれば、又弓箭にたづさはりて、西海の波の上、暫しと頼む須磨の浦、源氏の住所、平家のためにはよしなしと、知らざりけるぞはかなき。さる程に一の谷の合戦、

武藏の國の住人に
以下の軍物語は、平家物語卷九「忠度
最後の事」の本文に據つたものである。

光明遍照云々

「觀、無量壽經第九、眞身觀に出づる文。
阿彌陀佛の光明は、能く、十方世界を
照し、その光明に値遇し、信心決定し
て稱名念佛する衆生をば、一人も漏ら
さず、能く、光明中に攝り取りて捨て
ず、悉く彌陀の淨土へ往生せしめ給ふ
との意。云々。」(佛)

今はかうよ見えし程に、皆々船に取り乗つて、海上に浮む。
シテ「われも船に乗らんこて、汀の方に打出でしに、後を見
れば、武藏の國の住人に、岡部の六彌太忠澄と名のつて、六
七騎にて追つかけたり。これこそ望む所よと思ひ、駒の手綱
を引つ返せば、六彌太やがてむす組み、兩馬があひにござ
と落ち、かの六彌太を取つておさへ、既に刀に手をかけしに、
地『六彌太が郎等、御後より立ち廻り、上にまします忠度
の、右の腕を打落せば、左の御手にて、六彌太を取つて投げ
のけ、今は叶はじと思し召して、そこのき給へ人々よ。西拜
まんこ宣ひて、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨と宣ひ
し、御聲の下よりも、痛はしやあへなくも、六彌太太刀を抜
き持ち、遂に御首を打落とす。
シテ『六彌太心に思ふやう、

短冊を附けられたり
平家物語には「箆に結びつけられたる
文を取つて見れば」とあり、源平盛
衰記には「巻物を披き見れば」とある。
旅宿の題をすま
「旅宿の花」といふ題を掲ぐ。

花は根に
花は根に鳥は古葉に歸るなり春のとき
りを知る人ぞなき(千載集、崇徳院御
製)

地『痛はしやかの人の、御死骸を見奉れば、其の年もまだ
しき、長月頃のうす曇り、降りみ降らずみ定めなき、時雨ぞ
通ふむら紅葉の、錦の直垂は、たゞ世の常によもあらし。如
何さまこれは公達の、御中にこそあるらめと、御名ゆかしき
所に、箆を見れば不思議やな、短冊を附けられたり。見れば
旅宿の題をすま、行き暮れて木の下陰を宿させば、
シテ『花や今宵の主ならまし。忠度と書かれたり。
地『さては疑ひあらしの音に聞えし、薩摩の守にてますぞ
痛はしき。御身此の花の陰に立ちより給ひしを、かく物語
り申さんこて、日を暮らしとゞめしなり。今は疑ひよもあら
じ。花は根に歸るなり。我が跡とひてたび給へ。木陰を旅の
宿させば、花こそあるじなりけれ。

熊野

解題

平宗盛の侍女熊野は、老母の重病のために暇を乞うたが許されないで、心ならずも花見に伴はれて行つた。彼女の女は、途中見る物事につけて無常を感じ、母の身の上を氣遣つたが、遂に東山の花見の席で詠じた一首の歌は、ゆくりなくも、主人の心を動かして歸郷を許されるといふ筋で、しかも、その爰に至つたのは、清水寺觀音菩薩の靈驗であるとしてゐる。本文はその詞句の幽艶閑雅な點に於て、謠曲中隨一のものとして「熊野・松風に米の飯」とさへいはれてゐる。

出典

平家物語卷十「海道くだり」の段に、さらでも旅はもの憂きに、心をつくす夕まぐれ、池田の宿にも著き給ひぬ。かの宿の長者熊野が女侍、從がもとに、その夜は三位（平重衡）宿せられけり。中略やゝあつて中將、梶原を召して「さて

も、只今の歌の主はいかなるものぞ。やさしうも仕つたるものかな。」とのたまへば、景時畏つて申しけるは「君は未だ知し召され候はずや。あれこそ、八島の大臣殿の、いまだ當國の守にてわたらせ給ひし時、召され參らせて、御最愛候ひしに、老母をこれにとどめ置き、常は暇を申し、かども、賜はらざりければ、頃は彌生の初めにてもや候ひけむ、

いかにせむ都の春は惜しけれど馴れしあづまの花や散るらむといふ名歌つかまつり、暇を賜つてまかり下り候ひし、海道一の名人にて候。」とぞ申しける。

とあるのを資料とした。尙、熊野の事は、源平盛衰記にも出てゐる。

人物

- シテ 熊野
- シテツレ 朝顔
- ワキ 平宗盛
- ワキツレ 從者

池田の宿
 磐田郡にある。今、池田村といふ。天龍川の東岸にして、東海道の舊驛なれど、近世は衰へて、驛市の面目なく、今、荒村となりぬ。又、池田村時宗行興寺は、時宗の道場にて、舊來朱印地十六石、湯谷女の墓所とあり。(地)熊野
 又、湯谷を作る。平家物語には侍従とある。熊谷といふのは、家名でもあらうか。

ワキ「これは平宗盛なり。さても遠江の國池田の宿の長をば、熊野と申し候。久しく都に留め置きて候が、老母のいたはりごとて、度々暇を乞ひ候へども、此の春ばかりの花見の友と思ひ、とゞめ置きて候。いかに誰かある。」

ツレ「御前に候。」

ワキ「熊野來りてあらば、此方へ申し候へ。」

ツレ「畏つて候。」

ツレ「夢の間惜しき春なれや、夢の間惜しき春なれや。咲く頃花を尋ねん。これは遠江の國池田の宿、長者の御内に仕へ申す、朝顔と申す女にて候。」

ツレ「さても熊野久しく都に御入り候が、此の程老母の御いたはりごとて、度々人を御のぼせ候へども、更に御下りもなく候程に、此の度は朝顔が御迎へにのぼり候。」

道行「此の程の旅の衣の日も添ひて、旅の衣の日も添ひて、幾夕暮の宿ならん。夢も數添ふ假枕、明し暮して程もなく、都に早く著きにけり。都に早く著きにけり。」

ツレ「急ぎ候程に、これははや都に著きて候。これなる御内が熊野の御入り候所にてありげに候。まづまづ案内を申さばやと思ひ候。」

ツレ「いかに案内申し候。池田の宿より朝顔が参りて候。それそれ御申候へ。」

シテ「草木は雨露の恵み、養ひ得ては花の父母たり。況や人間に於てをや。あら御心もこなや何ごか御入り候らん。」

ツレ「池田の宿より朝顔がまわりて候。」
 シテ「なに朝顔と申すか、あら珍らしや。さて御いたはりは何ご御入りあるぞ。」

それ／＼
 其れなりと、人に注意を促す時、又、其の事と思ひ附いた時などにいふ語。

養ひ得ては
 養得自爲(花父母、洗來寧碎、藥君臣、)和漢期詠集、紀(長谷雄)

笑止
氣の毒に思ふ事。止は無意味の助字。

ツレ「以ての外に御入り候。これに御文の候。御覽候へ。」
シテ「あら嬉しや。まづまづ御文を見ようずるにて候。あ
ら笑止や、此の御文のやうも頼みずくなく見えて候。」
ツレ「左様に御入り候。」

シテ「此の上は朝顔をも連れて参り、又此の文をも御目にか
けて、御暇を申さうずるにてあるぞ。こなたへ來り候へ。」

シテ「誰か渡り候。」

ワキツレ「誰にて渡り候ぞ。や、熊野の御まゐりにて候。」

シテ「わらはが参りたる由、御申し候へ。」

ワキツレ「心得申し候。いかに申し上げ候。熊野の御参りに
て候。」

ワキ「こなたへ來れと申し候へ。」

ワキツレ「畏つて候。こなたへ御参り候へ。」

シテ「いかに申し上げ候。老母のいたはり以つての外に候と
て、此の度は朝顔に文をのばせて候。便無う候へども、そこ
見参に入れ候べし。」

ワキ「なにと、古里よりの文と候や。見るまでもなし。それ
にて高らかに讀み候へ。」

シテ「甘泉殿の春の夜の夢、心を碎く端となり、驪山宮の秋
の夜の月、終りなきにしもあらず。末世一代教主の如來も、
生死の掟をばのがれ給はず。過ぎにしきさらぎの頃申し、如
く、何とやらん此の春は、年ふりまさる朽木櫻、今年ばかり
の花をだに、待ちもやせじと心弱き、老いの鶯逢ふ事も、涙
に咽ぶばかりなり。唯然るべくは、よきやうに申し、しばし
の御暇を賜はりて、今一度まみえおはしませ。さなきだに親
子は一世の中なるに、同じ世にだに添ひ給はずは、孝行にも

甘泉殿

漢の武帝の寵姫李夫人の住んでゐた
宮。これから書面の文句。

驪山宮

唐の玄宗皇帝の寵姫楊貴妃の住んでゐ
た宮。

末世一代教主

末世に出てて現世一代を教化する主の
意。

如來

佛の尊稱。「如來とは、梵語タトハーガ
ラの譯。佛に十種名號ある中の一。眞
如より來生する義。佛の智慧、慈悲と
もに、眞如に契當し、眞如の全分即ち
佛陀と現るゝが故に、如より來生すと
いふ。」佛()にては釋迦如來を指す。

老いぬれば云々
 「昔身ありけり。身はいやしなから、男なむみこなりける。その母、長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮つかへしければ、まうづとしけれど、しばくえまうです。ひとり子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるほどに師走ばかりに、とみの事とて御文あり。驚きて見れば、こと事はなくて、
 老いぬればさらぬ別れのありといへば、いよいよ見まほしき君かなとなむありける。これを見て、馬にも乗りあへずまゐるとて、いといたう打泣きて、道すがら思ひける、
 世の中にさらぬ別れのなくもがな、千代もと祈る人の子のため」(伊勢物語)

書きとゞむ
 これて書面の文句は終る。

長岡
 山城の國乙訓郡にある。長岡は桓武帝數年筑都の地にして、其の宮城跡は、向日町大字鶴冠井に存すといふ。(地)

はづれ給ふべし。唯かへすがへすも命の内に今ひとたび、見参らせたくこそ候へこよ。老いぬればさらぬ別れのありといへば、いよいよ見まほしき君かなと、ふる事までも思出の涙ながら書きとゞむ。

地歌『そも此の歌ご申すは、そも此の歌ご申すは、在原の業平の、其の身は朝に隙なきを、長岡に住み給ふ老母の詠める歌なり。さてこそ業平も、さらぬ別れのなくもがな。千代もご祈る子の爲と、詠みし事こそ哀なれ。

シテ『今はかやうに候へば、御暇を賜はり、あづまに下り候べし。

ワキ『老母のいたはりはさる事なれども、さりながら、此の春ばかりの花見の友、いかでか見すて給ふべき。』

シテ『御詞を返せば恐れなれども、花は春あらば今に限るべ

からず。これはあだなる玉の緒の、永き別れとなりやせん。

唯御暇を賜はり候へ。

ワキ『いや、左様に心弱き身に任せてはかなふまじ。いかにも心を慰めの、花見の車同車にて、』ごもに心を慰まんご、

地歌『牛飼車寄せよとて、牛飼車寄せよとて、これも思ひの家の内、はや御出でと勧めれご、心は先きに行きかぬる、足弱車の力なき花見なりけり。

シテ『名も清き水のまにまにごめ來れば、

地『河は音羽の山櫻。

シテ『東路ごとも東山、せめてそなたの懐かしや。

地ヤシ『春前に雨あつて花の開くること早し。秋後に霜なうして落葉遅し。山外に山あつて山盡きず。路中に道多うして道極りなし。

これも思ひの家の内

此の世を佛説に火宅と云ふから、思ひの末の文字を火に取りてつゞけたのである。

足弱車の

車輪の堅固ならぬ車のやうに。

名も清き水のまにまに、とめくれば山に花散れる水のまに、とめくれば山に春もなくなりけり(古今集、清原深養父)「清き水」は「清水寺」にいひかけたのである。清水寺は洛東の名刹。「清水坂の上方平地より抜く凡百六十尺許の所に在り。」(地)

音羽の山

清水寺のある山。音羽ノ瀧といふのがある。音は掛詞。

東路ごとも東山

わが母のいます東路ごとも東だが、その東の名を貢ふ東山といひかけたのである。東山は、清水寺のある山脈一帯

春前に雨あつて、云々
 春前有雨花開早秋後無霜葉落遲（百聯抄解）
 山外に山あつて、云々
 山外有山山不盡路中多路路無窮（百聯抄解）
 山青く山白くして、云々
 山青山白雲來去、人樂人愁酒有無。（百聯抄解）
 誰か言ひし春の色
 誰言春色從東到（和漢朗詠集菅原文時）。東といふ文字を東山につけてゐる。
 四條・五條の橋の上
 宗盛の邸は六條であるから、河原に出でて、先づながめわたしたる景色をのべる。
 花衣
 花やかなる衣。
 九重
 九天に擬した禁中の異稱であるが、こゝでは、禁中のある所、即ち京都。
 河原表
 河原は加茂河原。表は江戸表などの表と同じく「ところ」の意。これから川を渡つて、清水の方へ行く順路をのべる。
 車大路
 くらまぢぢ

シテ『山青く山白くして雲來去す。』
 地『人樂み人愁ふ、これ皆世上の有様なり。』誰か言ひし春の色、げに長閑なる東山、四條・五條の橋の上、四條五條の橋の上、老若男女・貴賤都鄙、色めく花衣、袖を連ねて行末の、雲かど見えて八重一重、咲く九重の花ざかり、名に負ふ春のけしきかな、名に負ふ春のけしきかな。名に負ふ春のけしきかな。河原おもてを過ぎ行けば、急ぐ心の程もなく、車大路や六波羅の、地藏堂よこ伏し拜む。

シテ『觀音も同座あり。闍提救世の方便あらたに、たらちねを守り給へや。』

地『げにや守りの末すぐに、頼む命は白玉の、愛宕の寺も打過ぎぬ。六道の辻ごかや。』

シテ『げに恐しや此の道は、冥途に通ふなるものを、心ぼそ

鳥部山、

地『煙の末も薄霞む、聲も旅雁の横たはる、』

シテ『北斗の星の曇り無き、』

地『御法の花も開くなる、』

シテ『經書堂はこれかごよ。』

地『そのたらちねを尋ぬなる、子安の塔を過ぎ行けば、』

シテ『春の 行く駒の道、』

地『はや程もなくこれぞこの、』

シテ『車宿、』

地『馬留、こゝより花車、おりゐの衣播磨瀉、節磨の徒歩路清水の、佛の御前に念誦して、母の祈誓を申さん。』

ワキ『いかに誰かある。』

ワキツレ『御前に候。』

五條橋を渡つて眞直に行く道。
 六波羅の地藏堂
 六波羅密寺は道より左にある。此の境内に、昔地藏堂があつたから云ふ。
 觀音も同座あり
 地藏堂の内に觀音も共に安置されてゐるから云ふ。
 闍提救世の方便
 闍提は大惡不信の徒を云ふ佛語。このやうな不信の徒でも觀音の慈悲で救ひ給ふのを救世と云ふ。救ふ爲に種々の手段をめぐらすを方便と云ふ。一切の善根を焼失して佛所説の教誡を聽かず、永くこの苦輪を脱する能はざる極悪闍提の機を救濟せんがために、善巧方便して、これが手段を盡すを、佛語又「闍提とは、具さば一闍提、梵語イチチヤンチカと名づく（中略）佛法を誹謗し、因果の理法を信ぜざるものなり。このものは信を具せざるを以て、永く生死界に流轉して出期なし。云々。」（佛）
 白玉の
 「白玉の緒」といふ心から「愛宕」をいふためにつけたのである。但し掛詞として「を」おの相違がある。
 愛宕の寺
 「愛宕念佛寺一名六道珍皇寺といふ。續日本紀天長三年の條に見ゆ。洛東五條の末に方り、建仁寺の東南八坂塔の西にあり。」（地）

六道の辻 六道は佛語。善惡の業に因つて必ず到るべき六種の境界、即ち地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上をいふ。六道の辻は、分岐點をいふ。それが行く辻、即ち六道の寺邊の地名となつたもの。
 心ほそ鳥部山 鳥部山は阿彌陀峰をいふ。その邊の山野は、即ち昔の火葬場であつた。五條坂邊六道の東南に當る。火葬場のある處だから「心ほそ」といひ、又「煙の末」とつゞけたのである。
 音聲の律呂の呂から旅雁といひかけたのである。呂は低音であるから、悲哀の調を帯びた旅の雁の聲を形容したのである。
 北斗の星の曇りなき
 「北斗堂の灯籠を曰ふ。蓋妙見菩薩を祀るもの也。六道の東に之を記せる古圖あり。」
 又、春の雁は歸雁といつて、北方に赴くものだから北斗の北の字を受け、北斗星の曇りのないことを、御法の光に譬へて下につゞけたのである。
 北斗星前横旅雁、南樓月下擣寒衣、和漢期詠集。
 經書堂
 通解に清水坂の左側にある。昔、聖德太子が經を書き給つた處だと言ひ傳へ

ワキ「熊野はいづくにあるぞ。」
 ワキツレ「未だ御堂に御座候。」
 ワキ「何ごて遅なはりたるぞ。急いでこなたへご申し候へ。」
 ワキツレ「畏つて候。いかに朝顔に申し候。はや花のもこの御酒宴の始まりて候。急いで御参りあれこの御事にて候。其の由仰せられ候へ。」
 ツレ「心得申し候。いかに申し候。はや花のもこの御酒宴の始まりて候。急いで御参りあれこの御事にて候。」
 シテ「何ご早御酒宴の始りたるご申すか。」
 ツレ「さん候。」
 シテ「さらば参らうずるにて候。なうなう皆々近ふ御参り候へ。あら面白の花や候。今を盛りと見えて候に、何ごて御當座なごをも遊ばされ候はぬぞ。」
 ツレ「げにや思ひ内にあれば

てゐる。されば、經文の意でないから、きやうしよ堂と稱へないで、きやうか堂と稱へるのだといふ。
 子安の塔 門に入る際の右側に、今も子安の觀音といふのがある。泰産室は、俗に子安觀音と稱す。桓武帝宮人坂上春子の本願にして、皇子葛井親王の誕生を報賽したる也。三重塔も親王の御願にして、承和年中之を創す。又、産室坂。清水門前の地なり。泰産室。經書堂。來光院と稱す。一字一石書寫の納所也。等此に在り。一に三年に作る。蓋、泰堂に因める名義なり。(地)
 隙行く駒の道 郷生説約。約謝曰、人生一世固如駒駒過隙耳。史記。魏豹列傳。註に。秦際曰、莊子云無異駒駒過隙。則謂馬也。小願曰、白駒謂日影也。隙、壁隙也。以言速疾若日影過壁隙也。
 車宿 貴族の邸内の門側などに設けて、輿車を入置く建物。こゝは清水寺のそれなす。
 馬を繋ぐ木。駒留め。うまづまて。うまづめともいふ。こゝは清水寺のそれなす。
 おりぬの衣掃磨濁
 おりぬは、車を下り居といふより、織

色外に顯る。
 地「よしやよしなき世の習ひ、歎きても亦餘りあり。」
 シテ、サシ「花前に蝶舞ふ紛々たる雪、
 地「柳上に鶯飛ぶ片々たる金。花は流水に随つて香の來る事疾し。鐘は寒雲を隔てて聲の至る事遅し。清水寺の鐘の聲、祇園精舎をあらはし、諸行無常の聲やらん。地主權現の花の色、娑羅雙樹の理りなり。生者必滅の世の習ひ、げにためしある粧ひ。佛も本は捨てし世の、半は雲に上見えぬ、鷺のお山の名を殘す、寺は桂の橋柱、立ち出でて峯の雲、花やあらぬ初櫻の、祇園林・下河原。」
 シテ「南を遙に眺むれば、
 地「大悲擁護の薄霞、熊野權現の移ります、御名も同じ今熊野、稻荷の山の薄紅葉の、青かりし葉の秋又、花の春は清

りに掛けて衣につまげ、衣に張るといふ心から播磨湯といひかけ、播磨の飾磨郡から、禰といふ染物を出すから徒歩路といふ語を呼び出したのである。花前に蝶舞ふ。花前蝶舞。柳上鶯飛片々金。(百聯抄解) 花は流水に随つて。花隨流水香來遠、鐘隔寒雲聲到遲。(此の聯、出所未詳。通解には「古詩の句なるべし」とある。)

地主神現 其の地の主となつて守護する神。こゝは、清水寺の鎮守の神をいふ。地主神社は清水寺の傍に在り。花の名所にて、地主の櫻と稱す。白河上皇臨幸の事あり。(地) 鶯のお山の名を残す云々 祇園社・法觀寺等の東一帯の地を鶯ノ尾といふから、當時桂橋寺の山號を鶯のお山などというたのであらう。桂橋寺は下河原にある。 祇園林 祇園の神の森。 下河原 南禪寺町白河の水邊をいふ。永觀堂の西。 大悲擁護の薄霞

水の、唯頼め頼もしき、春も千々の花盛り、
 シテ『山の名の、音羽嵐の花の雪、
 地『深き情を人や知る。
 シテ『わらはお酌に参り候べし。』
 ワキ『いかに熊野、ひこさし舞ひ候へ。』
 地『深き情を人や知る。』

舞

シテ『なう／＼俄に村雨のして、花の散り候はいかに。』
 ワキ『げに／＼村雨の降り來つて、花を散らし候ふ。』
 シテ『あら心なの村雨やな。春雨の、
 地『降るは涙か、降るは涙か櫻花、散るを惜まぬ人やある。
 ワキ『由ありげなる詞のたね、取上げ見れば、『いかにせん、
 都の春も惜しけれど、』

大悲は佛教辭林に「一切の衆生を悲愍し、これが苦惱を除かん」と給ふ佛菩薩の御心をいふ。又擁護は、同書に「神佛の、その信者・行者を保護するをいふ」とある。長門本平家物語に「大悲擁護の雲は熊野山の峯にそひき」とある詞を取つて、熊野権現の形容としたのである。

熊野権現 熊野三所權現、又は熊野三山といふ。本宮には家津御子ノ神、新宮には速玉ノ神、那智には家津御子ノ神・速玉ノ神・天須美ノ神を祭る。 今熊野 新熊野神社をいふ。同社は、洛東法住寺日吉坂を去ること南二町許の處にある。後白河法皇が、熊野三山の神をいかに勧請されたのである。 稻荷の山 山城の國紀伊郡にある。深草山の北部で、山四に稻荷神社がある。 青かりし葉 時雨する稻荷の山のみぢ葉は青かりしより思ひそめてき(古今著聞集) 唯頼め 頼めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらん限りは(新古今、禰歌) 「此歌は清水觀音の御歌となんいひつ

熊野

シテ『馴れし東の花や散るらん。
 ワキ『げに道理なり哀れなり。はや／＼暇取らするぞ、東に下り候へ。』
 シテ『なに御暇と候や。
 ワキ『なか／＼の事、さく／＼下り給ふべし。』
 シテ『あら嬉しや尊やな、これ觀音の御利生なり。これまでなりや嬉しやな。』
 地『これまでなりや嬉しやな。かくて都にお供せば、又もや御意の變るべき。唯此の儘にお暇と、夕つけの鳥が鳴く、東路さして行く道の、やがて休らふ逢阪の、關の戸ざしも心して、明け行く跡の山見えて、花を見捨つるかりがねの、それは越路われは又、東に歸る名殘かな、東に歸る名殘かな。』

たへたる」とある初句を「唯頼め」と改めたのである。標茅原は下野の國都賀郡にある。

春雨の降るは涙か 櫻花散るを惜まぬ人
しなれば(古今集、よみ人しらす
一本、大友黒主)

詞のたれ

「倭歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。(古今集序) なかくの事
謡曲・狂言などの詞。いかにも。さなり。いふまでもなく。勿論などの意。
利生

「利益衆生なり。生あるものを利益するをいふ。(佛)
夕つけの鳥

「木綿著鳥。木綿垂を着けたる鳥。往古、世の亂れし時、京都の四方の關にて、鷄を放ちて、祭事を行ひたる事あり。稱して木綿著鳥といへり。(神)木綿垂は、したらせた木綿の布をいふ。夕は「云ふ」にひかけたのであるが假名が違つてゐる。
「鳥が鳴く東路
「鳥が鳴く」は上下に掛かる。下では「東」の枕詞として用ひられてゐる。

取材についての二風潮

謡曲全般の取材に通じて、二風潮が存してゐるやうである。即ち、王朝時代に材を取つたものと、鎌倉時代以後の史實に據つたものである。前者には、上臈の戀愛談や、和歌贈答の由来などの、優美な物語が多い。夕顔・葵ノ上・浮舟・住吉詣・須磨源氏などは源氏物語から、井筒・杜若などは伊勢物語から、求女塚・蘆刈・安達原などは拾遺和歌集の歌及び大和物語から、志賀は古今集序から出てゐる。後者には勇敢・悲愴なものが多い。俊寛・忠度・熊野・小督・七騎落などは平家物語・源平盛衰記から、小袖會我・夜討會我などは會我物語から、船辨慶は義經記から、壇風は太平記から出てゐる。尙、以上の二風潮の外に、當代の社會を反映したものや、唐土に取材したものもある。

安宅

解題

源義經が兄頼朝の不興を被り、陸奥に下らうとて、主従十二人、作り山伏となり、安宅關に通りがかる折しも、富樫某に怪まれ、既に危く見えたが、辨慶の詭計によつて、辛くも虎口の難を免れた事を作つたものである。脚色巧妙・文辭痛快のために或は演劇に仕組まれ、或は長唄に歌はれ、何人にも、よく知られるやうになつた。

出典 盛長私記によつて脚色したものらしい。義經記にも、この事は書いてあるが、これと似てゐて、同じではない。

人物 シテ 辨慶

子方 義經

ツレ 同行山伏九人

狂言 強力

ワキ 富樫某

安宅

富樫の何某
大日本地名辭書には、三州志の文を引いて「昔義經の北陸道へ走る、加賀介富樫泰家之を聞き、家臣を聚め、安宅に新關を構ふ」とある。

ワキ「かやうに候者は、加賀の國富樫の何某にて候。さても頼朝・義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿十二人の作り山伏となつて、奥へ御下向の由、頼朝きこしめし及ばれ、國々に新關を立て、山伏をかたく選み申せこの御事にて候。さる間この處をば、某承つて山伏をこゝめ申し候。今日も堅く申しつけばやと存じ候。如何に誰かある。」

〔從者〕御前に候。

ワキ「今日も山伏の御通りあらばこなたへ申し候へ。」

〔狂言〕畏つて候。

シテツレ〔山〕旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やし
伏九ノ次第 大第 鴻門楯破れ都の外の旅衣、日もはるばるの越路の末、思ひやるこそ遙なれ。

篠懸の露
篠懸は、修験者の服の上を被ふ衣。麻で作る。深山の篠の露を防ぐための服だといふ。其の袖、括の端の垂れた處を露といふ。それを朝露・夜露などの露

に掛けていふ。

鴻門楯破れ
漢の高祖が楚の項羽と鴻門の地に會した時の故事を引く。史記の項羽本紀に「張良至軍門見樊噲樊噲曰今日之事何如良曰甚急今者項莊拔劍舞其意常在沛公也噲曰此迫矣臣請入與之同命噲即帶劍擁盾入軍門交戟之衛士欲止不內噲側其盾以撞衛士仆地」
とある。こゝでは、辨慶が樊噲に比したのである。樊噲が、盾を擁して沛公を保護したやうに、辨慶が義經を保護したことも無効となつたことをいふたのである。尙、盾を衣の縦糸にいひかけて、下の旅衣の縁語としたのである。

伊勢の三郎云々
伊勢の三郎は和田義盛、駿河の次郎名は清重、片岡爲春、増尾兼房、常陸坊名は海尊、もとは圓城寺の僧。

文治三年二月(義經記等に依つたのである。平家物語とは違つてゐる。)
これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關(後撰集、蟬丸)
山隱す霞ぞ
山隱す春の霞ぞ恨しきいづれ都のさかひなるらむ(古今集、おと)
海津

シテ』さて御供の人々には、
ツレ『伊勢の三郎・駿河の次郎・片岡・増尾・常陸坊、
シテ』辨慶は先達の姿となりて、
ツレ』主従以上十二人、いまだ習はぬ旅姿、袖の篠懸露霜を、
今日分けそめていつまでの、限りもいさや白雪の、越路の春に急ぐなり。
シテツレ』時しも頃はきさらぎの、時しも頃はきさらぎの、きさらぎの十日の夜、月の都を立ち出でて、これやこの、行くも歸るも別れては、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、山隱す、霞ぞ春は恨めしき、霞ぞ春は恨めしき。
波路遙に行く舟の、波路遙に行く舟の、海津の浦に著きにけり。東雲早く明け行けば、淺茅色づく有乳山、
氣比の海、
宮居久しき神垣や、松の木、芽山、なほ行くさきに見えたるは、

近江の國高島郡にある。越前へ出る順路。波路途に琵琶湖を渡るさまをいふ。

浅茅色つく有乳山

八田の野の浅茅色づく有乳山峯の泡雪寒く降るら(萬葉集、人麿)。有乳山は、近江と越前との境にある。氣比の海

越前敦賀港のあたりの海。敦賀町に氣比神社といふのがあるので「宮居久しき」につづく。御食津神・伊香沙別命を祭る。

木芽山 越前の國敦賀郡と南條郡との境にあつて、今に木ノ芽峠といふ。 板取は、今虎杖と書かれてゐる。木ノ芽峠の麓にある小驛。柚山人は柚人といふに同じく、樹木を植ゑつけた山より材木を採る人であるから板取にかゝる。

麻生津 浅水とも書く。越前の國足羽郡にある。三國の港 越前の國坂井郡にある。九頭龍川の落口で、銚子口といふ。

柚山人の板取、河瀬の水の麻生津や、末は三國の湊なる、蘆の篠原波よせて、靡く嵐の烈しきは、花の安宅に著きにけり。 花の安宅に著きにけり。

「御急ぎ候程に、これははや安宅の湊に御著きに候。 暫くこの處に御休みあらうするにて候。」

子方「如何に辨慶。」

シテ「御前に候。」

子方「只今旅人の申して通りつる事を聞いてあるか。」

シテ「いや何とも承らず候。」

子方「安宅の湊に新關を立て、山伏を堅く選むごころ申しつれ。」

シテ「言語道斷の御事にて候ものかな。さては御下向を存じて立てたる關ぞ存じ候。これはゆゑしき御大事にて候。まづ

蘆の篠原

篠原は加賀の國江沼郡にある。大日本地名辭書に「今篠原村といふ。橋立湖津の東北に連る沙丘地にして、遠く安宅に至り、一方は海洋、一方は湖沼、其の間一里に滿たす」とある。海邊の地であるから、蘆の篠原といふたのである。但し蘆の篠原は蘆原と同義である。

花の安宅

安宅は「仇か」にいひ掛けたのである。裏面には、嵐を頼朝に、花を義経に擬したのである。安宅は、加賀の國能美郡にある海邊の地であるが、關趾は、今よくわからない。

言語道斷

言語で述べべき道の絶えたること。いはうやうなきこと。

この傍にて暫く御談合あらうするにて候。これは一大事の御事にて候間、皆々心中の通りを御意見御申しあらうするにて候。」

「我等が心中には、何程の事の候ふべき、たゞ打破つて御通りあれかしぞ存じ候。」

「暫く。仰せの如く此の關一所打破つて御通りあらうするは易き事にて候へども、御出で候はんずる行末が御大事にて候。唯何ごもして無異の義が然るべからうするご存じ候。」

子方「ごもかくも辨慶はからひ候へ。」

シテ「畏つて候。某きつと案じ出だしたる事の候。我等を始めて皆々につくい山伏にて候が、何ご申しても御姿隠れ御座なく候間、此のまゝにてはいがご存じ候。恐れ多き申し事にて候へども、御篠懸をのけられ、あの強力が負ひたる筈

を、そご御肩に置かれ、御笠を深々召され、如何にもくた
びれたる御體にて、我等よりあごに引きさがつて御通り候は
ば、なかなか人は思ひもより申すまじきと存じ候へ。」

子方「げにこれは尤にて候。さらば篠懸を取り候へ。」

シテ「畏つて候。いかに強力。」

〔狂言〕御前に候。

シテ「笈を持ちて來り候へ。」

〔狂言〕畏つて候。

シテ「汝が笈を御肩に置かるゝ事は、なんぼう冥加もなき事
にてはなきか。先づ汝はさきへ行き、關の様體を見て、誠に
山伏を選むか、又左様にても無きか、懇に見て來り候へ。」

〔狂言〕畏つて候。

強力は橋掛に行きかけ「さても〜難儀な事を仰せつけられた事かな。是

はしがり
橋懸

笈

行脚僧又は修験者などの、旅中、佛具・
衣服・書籍・食器等を入れて、背に負う
て行くもの。多くは、箱の制で脚があ
る。

能樂で、樂屋から舞臺に通ふ路。關干
があつて橋のやうに造られてゐる。

一の松
能舞の橋懸で、樂屋に最も近い處。橋
懸に沿つて、下に小松が三株並べ植ゑ
られてある。その最初の松の處をいふ。
垣かきだて
橋かきだてを立たてて並べて垣のやうにしたもの。

あびらうんけん
(後に註してある)五二頁参照。

後見柱

能舞臺で、橋懸から舞臺に入る時、左、
即ち仕手柱の反對にある柱。後見が坐
る處であるからいふ。狂言柱・太鼓柱
ともいふ。

貝かきだてを立て
陣貝かきだてを吹き立て。陣貝は、昔、陣中で
用ひ、兵士の進退などの合圖に吹き鳴
らした法螺貝。其の吹き鳴らす順序に
よつて、一番貝、二番貝、三番貝の稱が
ある。陣螺ともいふ。

非に及ばぬ。見て參らずはなるまい。さりながら咎められては如何ぢや。

まづこれは取つて參らう。」とて、兜巾をはづして懐中し、橋懸に行き、一
の松で「あれに見ゆるが關ぢや。さても〜おびたゞしい體かな。櫓・垣
橋かきだてを上げ、中々用心きびしい體ぢや。やあ又あの木のそらに、何やら眞黒
なものが四つ五つ懸けてあるは何ぢや。山伏のこゝぢや。」と云つて我が
首筋を押さへ「さても〜痛はしい事かな。餘り痛はしい事ぢや程に、一首
連ねて歸らう。山伏は貝吹いてこそ逃げにけれ、誰がおひかけてあびらう
んけん、あびらうんけん。」と云つて舞臺に歸り、シテに關の様體を告げ、
一首連ねたことなどを語り、シテより「汝はこさかしき者にて候。やがて
御跡より來り候へ。」といはれて、後見柱の處にくつろぐ。此の時シテから
「やがて、貝を立て候へ。」といはれて、扇を開き、貝に擬して、要かきだての處を
口に當て、「すわいすわい」といふて吹き鳴らしながら座にかへる。これ
は貝立かきだてと稱へて、斯道では、重きにおかれてゐる。

シテ「さらば御立ちあらうずるにて候。」

シテ「げにや紅は、園生に植ゑても隠れなし。」

紅くわなは園生そのぶに植ゑても、
優れた者は、凡庸ぼんどうの中なかに交まじつて居ても、
必ず目に立つ。義經記ぎけいぎに「くれなゐは、
園生そのぶに植ゑてもかくれなし。」

雨皮

生絹又は厚い油紙で作つた雨覆。

肩箱

山伏の笈の肩に附する小箱。

綾菅笠

あやに編んだ菅笠。

金剛杖

修験者の携帯する、白木の八角又は四角の杖。

ツレ「強力にはよも目をかけじこ、御簾懸みすだりを脱ぎ替へて、麻の衣あはらを御身にまごひ、

シテ「あの強力が負ひたる笈を、

子方「義經ぎけいこつて肩にかけ、

ツレ「笈の上には雨皮・肩箱取りつけて、

子方「綾菅笠にて顔を隠し、

ツレ「金剛杖にすがり、

子方「足痛あしいたげなる強力にて、

地「よろ／＼として歩み給ふ御有様ぞ痛はしき。

シテ「我等よりあごに引きさがつて御いごあらうずるにて候。さらば皆々御通り候へ。」

ツレ「承り候。」

証しやう「如何に申し候。山伏達の大勢御通り候。」

ワキ「何なにも山伏の御通りあると申すか。心得こころえてある。なう

客僧達、これは關にて候。」

シテ「承り候。これは南都東大寺建立のために、國々へ客僧を遣され候。北陸道ほくりくどうをばこの客僧承つて罷り通り候。先づ勸めに御入り候へ。」

ワキ「近頃殊勝しゆしやうに候。勸めにはまゐらうずるにて候。さりながら、これは山伏達に限つてごめ申す關にて候。」

シテ「さて其の謂はれは候。」

ワキ「さん候。頼朝・義經御中不和ふしあひにならせ給ふにより、判官殿はんぐわんだいは奥秀衡おくしゆへいを頼み給ひ、十二人の作り山伏やまぶしとなつて、御下向ごげうの由其の聞え候間、國々に新關しんかんを立て、山伏をかたく選み申せこの御事にて候。さる間、此の處をば、某承つて山伏をごめ申し候。殊ことにこれは大勢御座候間、一人も通し申す

南都東大寺建立
奈良の東大寺は、治承四年平重衡へいしげに燒打やぶにせられたから、それを再建する意。
客僧
旅僧
勸め
勸進、即ち佛寺等に要する金錢を諸方に募集することをいふ。もと勸誘くわんすい導の義から出たのである。

奥秀衡
藤原秀郷九代の孫で、基衡の子。陸奥守に任ぜられ、鎮守府將軍を兼ねてゐた。平泉に居り、文治三年に卒した。

まじく候。」
 シテ「委細承り候。それは作り山伏をこそごめよと仰せ出だされ候ひつらめ。よも眞の山伏をごめよとは仰せられ候まじ。」

狂言「いや昨日も山伏を三人まで切つたる上は。」

シテ「さて其の切つたる山伏は判官殿か。」

ワキ「あらむつかしや問答は無益。一人も通し申すまじい上は候。」

シテ「さては我等をもこれにて誅せられ候はんずるな。」

ワキ「中々の事。」

シテ「言語同断、かゝる不祥なる處へ來かゝつて候ものかな。

此の上は力及ばぬ事。さらば最後の勤めを始めて、尋常に誅せられうずるにて候。皆々近う渡り候へ。」

中々の事
 熊野の頭注参照。(三八頁)

尋常に
 立派に・殊勝に・けなげに。

役の優婆塞えんぱうばうさい

「役ノ小角。大和國葛城郡新原村の人。舒明天皇五年正月朔日を以て生る。性敏悟にして博學、佛乘に通ず。三十二歳にして家を棄て、葛城山に入り、嚴窟に籠ること三十四年。藤葛を以て衣となし、松葉を以て食に充つ。(中略)大寶元年六月、壽七十にして、母と共に唐土に去る。後世小角の流をくみ、大和國大峯山に出入して、苦修練行するものあり。山伏・修験者の類これなり。(佛)又、優婆塞は、梵語「ウツパリサカ」の訛。近事男・近善男、或は近住男などと譯されてゐる。俗體で佛道を修する人。

行儀 坐臥進退の儀法作法たちをふるまひ。不動明王 忿怒の相を現はし、外道・惡魔を降服する尊體。

兜巾とんじん 一頭巾に同じ。役の行者の法流を汲める修験者、即ち山伏ともが、頭に鉢巻をなし更に額に當つるものなり。(佛)五智の寶冠 「大日如來の戴きたまへる寶冠は、五角形をなし、五方面に五佛の像あり。これ大日如來は、五智・五佛の總體なることを表示するものなり。(佛)五智とは、大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智・法界體性智をいふ。

安宅

ツレ「承り候。」

シテ「いで、最期の勤めを始めん。夫れ山伏といつは、役の優婆塞の行儀を受け、

ツレ「其の身は不動明王の尊容をかたごり、

シテ「兜巾といつは五智の寶冠なり。

ツレ「十二因縁のひだをすゑて戴き、

シテ「九會曼荼羅の梯の篠懸、

ツレ「胎藏黑色のはゞきををはき、

シテ「さて又八目の草鞋は、

ツレ「八葉の蓮華を踏まへたり。

シテ「出で入る息に阿吽の二字を稱へ、

ツレ「即身即佛の山伏を、

シテ「こゝにて討ちごめ給はん事、

十二因縁のひだ
佛敎辭林「兜巾」の解釋中に「黒色にし
て、十二の寶積を有し、前八分にこれ
を著す。その色黒きは、最初の無明を
顯し、その寶積に十二あるは、衆生の
具する十二因縁を表はし、著るに前八
分なるは、不動明王頂上の八葉を示す
ものなりといふ」とある。十二因縁と
は、無明・行・識・名色・六處・觸・受・愛・
取・有・生・老死をいふ。

九會曼荼羅
「九會」とは、眞言密敎に立つる處の名
目。一に印會、二に理會、三に降三
世會、四に降三世三昧會、五に成身會、
六に羯磨會、七に微細會、八に供養會、
九に四印會なり。曼荼羅は、輪圓具足
の義にして、完全圓滿の謂なれば、こ
の九會を、一具の法門として執如する
ところなく圖示するを九會曼荼羅とい
ふ。(佛)

柿
柿色の略。柿漉で染めたやうな赤茶色。
胎藏
「眞言宗にいふところの兩部(金剛界・
胎藏界)曼荼羅の一なり。胎藏界は、孩
兒が母胎中に攝持發育せらるゝ如く、
一切の萬法身が、この六大法身の理徳
の中に攝持發育せらるゝを顯はして胎
藏の名を立つ。要するに、これ大日如
來の理性をいふなり。」(佛)「此に胎
藏といふのは、胎藏界の理想をあらは
した曼荼羅をいふ。」

ッレ「明王の照覽計り難う、
シテ「熊野權現の御罰の當らん事、
ワキ「立ちどころに於て、
シテ「疑ひあるべからず。
地「俺阿毘羅咩欠と、數珠さら〜と押しもめば、
ワキ「近頃殊勝に候。先きに承り候ひつるは、南都東大寺の
勸進と仰せ候間、定めて勸進帳の御座なき事は候まじ。勸進
帳をあそばされ候へ。これにて聽聞申さうするにて候。」
シテ「何と勸進帳を讀め候や。」
ワキ「中々の事。」
シテ「心得申して候。」
シテ「もごより勸進帳はあらばこそ。笈の中より往來の卷物
一卷取り出だし、勸進帳と名づけつ、「高らかにこそ讀み上

八目の草鞋
八目草鞋ともいふ。各に乳の八つある
わらんぢ。修験者などの用ひるもの。
八葉蓮華に象つたのであるといふ。

八葉の蓮華
胎藏界曼荼羅中臺八葉院は、この八葉
の蓮華を座となして、大日如來・四佛・
四菩薩在す。(佛)

阿吽
阿吽は梵語「秘密佛敎にては、悉曇梵
語の字母個々に就きて、巧に萬有の原
理を説明するを常とす。今に萬有の原
字に就いてはば、阿は字母の初韻な
るが故に、元初の法界の義とし、吽は
字母の終なるが故に、法界の太終の
義とす。(中略)要するに、法界の二字
は、法界の二面たる兩極の各一を示す
もの、これを阿吽の二字とす。」又「阿
吽の息とは、前説の更に轉じて、呼吸
に配せられしもの、呼吸を阿の息とい
ひ、吸氣を吽の息といふ。」(佛)

即心即佛
即心即佛、即心是佛に同じ。自身の常體
即ち佛といふ義。(佛)
明王
こゝでは、不動明王を指す。
熊野權現
山伏の詣ぐる神であるから、殊に指し
たのである。(熊野の段參照、三七頁)

げけれ。夫れつら〜惟れば、大恩教主の秋の月は、涅槃
の雲に隠れ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし。こゝ
に中頃帝おはします。御名をば聖武皇帝と名づけ奉り、最愛
の夫人に別れ、戀慕やみがたく、涕泣眼に荒く、涙玉を貫く
思ひを、善途に翻して廬遮那佛を建立す。かほごの靈場の、
絶えなん事を悲みて、俊乗坊重源、諸國を勸進す。一紙半錢
の奉財の輩は、此の世にては無比の樂に誇り、當來にては數
千蓮華の上に座せん。歸命稽首敬つて白すこ、天も響けと讀
みあげたり。

ワキ「關の人々肝を消し、
地「恐れをなして通しけり、恐れをなして通しけり。
ワキ「急いで御通り候へ。」
シテ「承り候。」

阿毘羅呼欠おんあびらうけけん 中胎藏界の木草、密教、兩部曼荼羅大意なり。阿等の五字、即ち胎藏界、中台八葉院の五字、即ち胎藏界にして、この五字、即ち地・水・火・風・空の五大の種子云々。要するに、この五字眞言は、胎藏大日の内證を顯示したるものにして、法界實相の正大の眞言を唱ふれば、法界實相の正持力により、迷に無上菩提を證すとす。これ、この眞言の利益なり。(佛)

勸進帳 勸進の趣意を記して寄附を募るに用ふる帳簿

往來 書翰のやりとりの文案を集め記した書

大恩教主 一切衆生が生死界を出離し、煩惱を斷絶するを得るは、一に釋尊出世の賜なり。故に大恩教主といふなり。(佛)

涅槃の雲 涅槃は、涅槃那「ニルバーナ」或は泥洹なる梵語にして、寂滅・圓寂・滅度。無爲等と譯す。迷妄を破して證得する眞理の、寂滅無爲にして、凡夫生死の騷擾なるが如くならざるを以て、涅槃的に名を附して、かくいへるなり。

「涅槃の雲は、涅槃そのものを雲に喩へたるなり。釋尊、涅槃に入り給ひて

狂言「如何に申し上げ候。判官殿の御通り候。」
(從者)「如何にこれなる強力さまれこそ。」
 ワキ「すは我が君を怪むるは、一期の浮沈極りぬも、「皆一同に立歸る。」
 シテ「あ、暫く。あわて、事を仕損ずな。やあ、何さてあの強力は通らぬぞ。」
 ワキ「あれは、こなたよりこめて候。」
 シテ「それは何さておこめ候ぞ。」
 ワキ「あの強力が、ちと人に似たるご申す者の候程に、さてこめて候よ。」
 シテ「何と、人が人に似たるごは、珍しからぬ仰せにて候。さて誰に似て候ぞ。」
 ワキ「判官殿に似たるご申す者の候程に、落居の間留めて候。」

再び見るべからざること、月の雲に隠れたるが如しといふ意。(佛)

生死長夜の長き夢

「生死とは、生老病死の四相のうち、前後を擧げて中略したるもの。迷へる衆生のうくる苦の果報なり。又一この生死界に沈淪するものは慧明を有せざるを以て、これを暗黒なる長夜に譬へて、生死長夜といふ。(中略)生死長夜の夢といひ、長夜の眠といふは、醉生夢死の迷界の闇冥なるをいへるなり。(佛)

毘盧遮那佛びるしやなぶつ 毘盧遮那佛の略。毗盧遮那佛「バイイローチャナ」は梵語にして、毗は徧、盧遮那は光明照の義なり。故に毗盧遮那は光明徧照ともいふべく、或は徧一切處・大日・照ともいふべし。(中略)華嚴天台の兩宗にては、この毗盧遮那を釋迦牟尼佛の内證たる靈體佛を特稱すと解すれども眞言宗にては釋迦・彌陀等と別佛なる大日如來の梵名とせり。(佛)

俊乘坊重源しゅんじやうぢゆうげん 俗名は重定、俊乘坊、また阿彌陀佛と號す。十三歳、醍醐寺にありて密教を學び、のち、黒谷に法然上

シテ「や、言語道斷、判官殿に似申したる強力は一期の思出な。腹立ちや日高くは、能登の國まで差さうずるご思ひつるに、わづかの笈負うてあごにさがればこそ人も怪むれ。總じて此の程、憎し憎しと思ひつるに、いで物見せてくれんごて、金剛杖をおつ取つて散々に打擲す。通れこそ。や、笈に目を懸け給ふは、『盗人ごうな。』
 ツレ「かたがたは何故に、かたがたは何故に、か程賤しき強力に、太刀・刀ぬき給ふは、めだれ顔の振舞は、臆病の至りかご、十一人の山伏は、打刀ぬきかけて、勇みかゝれる有様は、如何なる天魔鬼神も恐れつべうぞ見えたる。
 ワキ「近頃誤りて候。はや、御通り候へ。」
 シテ「さきの關をばはや拔群に程隔たりて候間、この處に暫く御休みあらうずるにて候。皆々近う御参り候へ。如何に

人を訪ひ弟子となりて淨土教を究む。
 仁安二年入宋。翌年九月榮西禪師と
 ともに歸朝す。治承四年十二月、東大
 寺兵火に罹るや、朝命を奉じ、再建の功
 人に代り、諸國を勸進して、再建の功
 奏す。ために大和尚位に叙せらる。
 建永元年六月五日、東大寺淨土堂に寂
 す。壽八十六。重源大徳はその敬稱し
 (佛)
 歸命とは梵語、南無「ナマス」にて、
 佛の命合に歸順し、または、自己の命
 根を歸投するの義、即ち信順の極な
 り。(佛)
 稽首を地につくまで下げて拜禮する事。
 抜群に
 此は「餘程」といふぐらゐの意。
 惡しく心得
 心得かたが惡かつた。

申上げ候。さても只今は餘りに難儀に候ひし程に、不思議
 の働きを仕り候事、『これと申すに君の御運盡きさせ給ふによ
 り、今辨慶が杖にも當らせ給ふと思へば、いよ／＼あさまし
 うこそ候へ。

子方「さては惡しくも心得ぬぞ存ず。如何に辨慶、さても唯
 今の機轉更に凡慮よりなす業にあらず。唯天の御加護とこそ
 思へ。『關の者ごもわれを怪め、生涯限りありつる處に、ごか
 くのは是非をばもんだはずして、唯眞の下人の如く、散々に打
 つてわれを助くる、これ辨慶が謀に非ず、八幡の、

地『御託宣かと思へば、忝くぞ覺ゆる。』それ世は末世に
 及ぶごいへごも、日月は未だ地に墜ち給はず。たごひ如何な
 る方便なりとも、まさしき主君を打つ杖の、天罰にあたらぬ
 ことやあるべき。

さながらに
 恰も。(下の「覺めたる」を修飾する副
 詞。)

屍か西海の浪に沈め
 八島・壇浦の合戦を指す。
 舟に浮み云々
 攝津の渡部から、風波を凌いで阿波に
 渡海したこと。
 山脊の馬蹄も見えぬ云々
 鐵榜ノ峰・鶴越から一ノ谷に攻めおとし
 たこと。時は、壽永三年二月の餘寒の
 頃であつた。
 とかく
 明石の門(明石海峡)を兎角の兎に掛け
 てゐる。

子方『げにや現在の果を見て、過去・未來を知るごいふ事、
 地『今に知られて身の上に、憂き年月のきさらぎや、下の
 十日の今日の難を、のがれつるこそ不思議なれ。

子方『唯さながらに十餘人、
 地『夢の覺めたる心地して、互に面を合せつ、泣くばか
 りなる有様かな。』然るに義經、弓馬の家に生れきて、命を
 頼朝に奉り、屍を西海の浪に沈め、山野海岸に、起きふしあ
 かす武士の、鎧の袖枕、かたしく隙も波の上、或時は舟に浮
 み、風波に身を任せ、或時は山脊の、馬蹄も見えぬ雪のうち
 に、海少しある夕波の、立ちくる音や須磨・明石の、ごかく
 三年の程もなく、敵を亡ぼし靡く世の、其の忠勤も徒に、な
 りはつる此の身の、そも何ごいへる因果ぞや。

子方『げにや思ふ事、叶はねばこそ憂き世なれご、

讒臣
梶原景時等を指す。
遼遠
遙に遠きさまにいふ語。
ことわり給ふべきなるに
神佛が是非を判断したまふ筈なるに。

如何に申し候
既に追つつき、案内を乞ふ詞。
聊爾
施忽な事。

地「知れどもさすがなほ、思ひかへせば梓弓の、すぐなる人は苦みて、讒臣は彌増しに世に在りて、遼遠東南の雲を起し、西北の雪霜に、責められ埋る憂き身を、ここわり給ふべきなるに、唯世には、神も佛もましまさぬかや。恨めしの憂世や、あら恨めしの憂世や。」

ワキ「如何に誰かある。」

狂言「御前に候。」

ワキ「さても山伏達に聊爾を申して、餘りに面目もなく候程に、追つつき申し、酒を一つ参らうずるにてあるぞ。汝は先きへ行きてごめ申し候へ。」

狂言「畏つて候。如何に申し候。先きには聊爾を申して、餘りに面目もなく候にて、關守のこれまで酒を持たせて、参られて候。」

シテ「言語道斷の事、やがて御目に懸らうずるにて候。」

この時、シテは心得て、判官に向ひ黙禮すると、判官は又強力になる心で、後見座でくつろぎ、シテもくつろぎ、ワキは、舞臺に入つて判官のゐた跡に著座する。

やがて、シテは立つて橋掛に行き、

シテ「げに〜これも心得たり。人の情の盃に、受けて心を取らんこや。これにつきてもなほ〜人に『心なくれそ吳織。』」

地「怪められるな面々、辨慶に諫められて、此の山陰の一宿りに、さらりと圓居して、處も山路の菊の酒を飲まうよ。」

シテ「おもしろや山水に、」

地「面白や山水に、盃を浮めては、流れに引かる、曲水の、手まづ遮る袖ふれて、いざや舞ひを舞はうよ。もこより辨慶は、三塔の遊僧、舞ひ延年の時の和歌、これなる山水の、落

人の情の盃に
盃は逆にいひ掛け、人情の順逆常ならざることをいふ。
心なくれそ
氣を許すな。
吳織
「心なくれそ」の「くれ」から、吳を呼び出し、吳織とつけたのである。吳織は應神天皇の時に、吳・漢からわが國に渡來した工女。
怪めらるな面々
「怪め」の「あや」は、漢織の名にいひ掛けたもの。
山路の菊の酒
ぬれてほす山路の菊の露のよにいつか千とせをわればへにけむ（古今集）仙

宮に、菊をわけて、人の到れるかたな
 岸水其甘鬱(胡縣北有菊水其涯芳烈被
 陽の露(荆州記)向その他、風俗通にも南
 命等の祝意を示すために、この語を用
 流に引かるる曲水の
 漢期(漢書)管原雅規(古へ三月上巳の
 日)流水に盃を浮べ、その流れ来る時、
 受けた人が詩を作つて、酒を飲む遊び
 をしたが、これを曲水の宴と云つた。
 禁裡の御遊にも行はれたが、その起原
 傳來したものである。
 手先づ速る
 盃の流れて来ようが早い時は、詩はま
 だ出来てゐないでも、先づ手を出して、
 盃を速り取るといふ意。
 袖が盃に觸れて、袖を振りて舞ふと
 に云ひ掛けたもの。
 三塔
 比叡山には、東塔・西塔・横川の三塔が
 遊僧
 遊學の僧。
 舞ひ延年の
 「舞ひは延年ノ舞の」といふ意。延年、
 舞は、有職故實辭典に「僧家の歌舞。

ちて巖に響くこそ、 鳴るは瀧の水。

シテ「たべ酔ひて候程に、先達お酌に参らうずるにて候。」

ワキ「さらばたべ候べし。とても事の事に先達一さし御舞ひ候へ。」

シテ「承り候。」

地「鳴るは瀧の水。」

男 舞

歌シテ「鳴るは瀧の水。」

地「日は照るとも絶えずさうたり、絶えずさうたり。さく

く立てや、手束弓の、心ゆるすな、關守の人々。暇申して

さらばよこて、笈をおつさり、肩にうちかけ、虎の尾を履み

毒蛇の口を、遁れたる心地して、陸奥の國へぞ下りける。」

其の起原詳ならず。中古の末頃より近
 古にかけて、頗る行はれしものなり。近
 吾妻鏡(目集)に云ふ、延年は、少年
 の法師二人、赤き袍を著し、白き袈裟にて
 頭を包み、短刀を背に指し、中啓を持ち、
 つげ、高香を穿つ。又舞の中に「如く
 鼻高香を穿つ。又舞の中に「如く
 赤袍五人、白一人、五條袈裟、經帽子。
 中啓、高香等なり。各一行に進み出て
 去。僧徒、天下安全のために修行する
 舞なり。叡山・南都の僧傳來すること
 なり。云々。
 これなる山水の云々
 今、目前の景色が延年ノ舞の歌詞に適
 したるをいひ「鳴るは瀧の水」といふ
 延年ノ舞の歌詞の一句を論ふ。上の「和
 歌」といふ語は、この句にかゝる。
 とうたりとくく
 「變たり」といふ瀧の音の「とう」から
 受けて「疾く」というたのである。
 手束弓の心ゆるすな
 「立てや」を受けて「手束」というたの
 である。手束弓は、弓といふのと同じ
 い。弓に弦をかける時には、曲げ挽め
 た弓竹を少しも緩めると弦がかゝら
 ぬから「心ゆるすな」にいひかけたので
 ある。
 履虎尾(履虎尾、不噬人亨。(易の履卦) 心之
 憂危者、踏虎尾、涉于春冰。(書經)

當代の社會を反映したもの

當代(主として室町時代)を反映したもの、即ち、後
 世の世話物とも稱すべき作品も、謡曲中に少くない。そ
 の中で、最も多いのは、親子の間に起つた悲劇と敵討と
 である。櫻川・隅田川・荊萱・百萬・歌占などは前者の
 例で、望月・放下僧などは後者の例である。尙、君を失
 つて狂亂した高野物狂などもあり、又夫婦の愛情に關す
 るものでは、斑女や舞車などもある。
 以上の外に、材を唐土に取つた張良・項羽・楊貴妃・
 天鼓・邯鄲などもある。

櫻川

解題

櫻子といふ愛兒が、母の貧を救はうとて、人買に我が身を賣り、東國に下つたが、母はこれを知り、悲みの餘り、その跡を慕ひ行き、遂に常陸の櫻川で廻り合ふといふ作意である。散り交ふ櫻花の下を舞臺とし、全篇花に始まり花に終つてゐる。景情具備、謂はゆる狂女物の中での傑作である。

出典

本曲についての文學上の資料は未だ見當らない。

人物

前ジテ 狂女(櫻子の母)

後ジテ 同

子方 櫻子(誦ナシ)

ワキ 磯部寺住職

ワキヅレ 從僧二人

ワキヅレ 人商人(男)

ワキヅレ 里人

人商人
ひとあきうど。人の子をがどはかして賣買するもの。人買ひ。

櫻の馬場
「日向の國兒湯郡咲屋神社の邊にありといふ。」(通)

構へて
必ず。

川

ワキヅレ 「かやうに候者は、東國方の人商人にて候。われ久しく都に候ひしが、此の度は筑紫日向に罷下りて候。又きのふの暮程に、幼き人を買ひ取りて候。かの人申され候には、此の文と身の代を、櫻の馬場の西にて、櫻子の母と尋ねて、確に届けよと仰せ候程に、只今櫻子の母の方へと急ぎ候。此のあたりにてありげに候。まづ／＼案内を申さばやと存じ候。いかに案内申し候。櫻子の母の渡り候か。」

シテ 「誰にて渡り候ぞ。」

ワキヅレ 「さん候。櫻子の御方より御文の候。又此の代物を確に届け申せと仰せ候程に、これまで持ちて参り候。構へて確に届け申すにて候。」

シテ 「あら思ひよらずや。先づ／＼文を見うずるにて候。」

此の年月の御有様
年來の、母の貧苦の御様子。
のう其の子は……ものを
人商人を呼び留めていふ詞。

出離

「厭ふべき迷界を離れ出づるの謂なり。
迷界とは、即ち欲・色・無色の三界のこ
となり。」(佛)

獨り伏屋の

こひわびて獨り伏屋に、よもすがらおつ
る涙や音なしの瀧(詩花集、藤原俊忠)
獨り伏す意を伏屋にかけていふ。

草の戸の明かし

草葺のいほりの戸、明かしは、戸を
あける事と夜をあかす事とにかけてい
ふ。

木華開耶姫

「木花之開耶姫、亦の名、菅田鹿葦津姫
命、また神阿多都比賣とも申す。大山
祇神の御女にして、瓊々軒尊の妃神と
いふ。容色姵美、依りてこの御名ありと
いふ。」(神)

「さても〜此の年月の御有様、見るも餘りの悲しさに、人
商人に身を賣りて、東の方へ下り候。」「のう其の子は賣るま
じき子にて候ものを。や、あら悲しや。はや今の人も行き方
知らずなりて候はいかに。」
「これを出離の縁として、御様を
も變へ給ふべし。唯かへすがへすも御名殘こそ惜しう候へ。」
「名殘惜しくは何しにか、添はで母には別るらん。獨り
伏屋の草の戸の、獨り伏屋の草の戸の、明かし暮して憂き時
も、子を見ればこそ慰むに、さりこては我が頼む、神も木華
開耶姫の、御氏子なるものを、櫻子とめてたび給へ。さなき
だに住みうかれたる古里の、今は何にか明暮を、堪へて住む
べき身ならねば、我が子のゆくへ尋ねんと、泣く〜迷ひ出
でて行く、泣く〜迷ひ出でて行く。」
「頃待ち得たる櫻狩、頃待ち得たる櫻狩。山路の春に急

ワキ

「頃待ち得たる櫻狩、頃待ち得たる櫻狩。山路の春に急

山野に櫻を尋ねて遊びあること。

磯部寺

常陸の國眞壁郡磯部にあつた寺。大日
本地名辭書に「磯部。今、東那珂村の
大字にて、小碓の北なり。櫻川は佛頂
山に發し、西南流して此の地を過ぐ。
論曲櫻川に、磯部寺と云ふは、此な
る神宮寺を指す。」

筑波山

筑波山このもかもの
筑波山このもかもの
が御かげにますかげはなし(古今集常
陸歌)

雲の林

花み雲に見たていふ。

「これは常陸の國磯邊寺の住僧にて候。又これに渡り候

幼き人は、いづくとも知らず愚僧を頼む由仰せ候程に、師弟
の契約をなし申して候。又此のあたりに櫻川とて、花の名所
の候。今を盛りの由申し候程に、幼き人を伴ひ、只今櫻川へ
と急ぎ候。」
「筑波山、このもかもの花盛、雲の林の陰繁き、
緑の空もうつろふや、松の葉色も春めきて、嵐も浮む花の波、
櫻川にも著きにけり、櫻川にも著きにけり。」

「いかに申し候。何とて遅く御出で候ぞ、待ち申して

候。」

「さん候。皆々御供申し候程に、さて遅なはりて候。

「あら見事や候。花は今を盛りと見えて候。」

「なか〜の事、花は今が盛りにて候。又こゝに面白

き事の候。女物狂の候が、美しき抄綱を持ちて、櫻川に流る

物狂
ものぐるひ。きちがひ。

抄綱

櫻川

又手。魚をすくひ捕る具。形、箕に似て前廣く後狭く、これに柄を附けた網。

花を抄ひ候が、けしからず面白う狂ひ候。これに暫く御座候ひて、此の物狂を幼き人にも見せ参らせられ候へ。」
ワキ「さらばその物狂をこなたへ召され候へ。」
ワケツレ「心得申候。やあゝかの物狂に、いつもの如く抄網を持ちて、こなたへ來れと申し候へ。」

花散れる
花散れる水のまに／＼とめくれば山にも春は無くなりけり(古今集、清原深養父)

一後シテ『いかにあれなる道行き人。櫻川には花の散り候か。』
「何散りがたになりたるこや。悲しやな、さなきだに、逝く事易き春の水の、流る、花をや誘ふらん。」『花散れる水のまに／＼とめ來れば、山にも春はなくなりけりと聞く時は、少しなりとも休らはば、花にや疎く雪の色、櫻花、櫻花、散りにし風の名残には、』

水なき空に
櫻花散りにし花の名残には水なき空に波ぞ立ちける(古今集、紀貫之)

地『水なき空に波ぞ立つ。』
シテ『思ひも深き花の雪。』

散るは涙の

春雨の降るは涙か櫻花散るを惜まぬ人
しなれば(古今集、大友黒主)

箱崎の浪立ち出でて
常陸なる駿河の海の須磨の浦波立ち出でて(源氏物語、常夏の巻)
「この歌は數箇國の名所を一つによみこんだ拙い歌である」箱崎は筑前の國粕屋郡にある地名。

地『散るは涙の川やらん。』

サシテ『これに出でたる物狂の、故郷は筑紫日向のもの、さも思ひ子を失ひて、思ひ亂る、心づくしの、海山越えて箱崎の、浪立ち出でて須磨の浦、又は駿河の海過ぎて、常陸とかやまで下り來ぬ。げにや親子の道ならずは、遙けき旅をいかにせん。こゝに又名に流れたる櫻川にて、さも面白き名所あり。』
『別れし子の名も櫻子なれば、形見といひ折柄といひ、名も懐しき櫻川に、』

形見

形見にいひかけてゐる。

天さがる

鄙の枕詞

冬ごもりして云々

櫻川

地歌『散り浮く花の雪を汲みて、みづから花衣の、春の形見残さん。花鳥の、立ち別れつ、親子の、立ち別れつ、親子の、行くへも知らで天さがる、鄙の長路に衰へば、たごひ逢ふとも親ミ子の、面忘れせばいかならん。うたてや暫しこそ、冬ごもりして見えずとも、今は春べなるものを、我が』

難波津にさくやこの花冬こもり今を春
べと咲くやこの花(古今集序)

子の花はなご咲かぬ、我が子の花はなご咲かぬ。

「此の物狂の事にてありげに候。立ち寄りて尋ねばやこ
思ひ候。いかにこれなる狂女、おここの國里はいづくの人
ぞ。」

「これは遙の筑紫の者にて候。」

「それは何にてかやうに狂亂とはなりたるぞ。」

「さん候。唯一人ある忘れ形見の縁子に、生きて離れて
候程に、思ひが亂れて候。」

「あら痛はしや候。又見申せば、美しき抄綱をもち、流
る、花を抄ひ、剩へ渴仰の氣色見え給ひて候は、何ぞ申した
る事にて候ぞ。」

「さん候。我が古里の御神をば、木華開耶姫と申して、
御神體は櫻木にて御入り候。されば別れし我が子も其の御氏

子なれば、櫻子と名づけ育てしかば、「神の御名も開耶姫、
尋ぬる子の名も櫻子にて、又此の川も櫻川の、名も懐しき花
の散りを、あだにもせじと思ふなり。」

「謂はれを聞けば面白や。げに何事も縁はありけり。さ
ばかり遠き筑紫より、此の東路の櫻川まで、下り給ふも縁よ
のう。」

「まづ此の川の名に負ふ事、遠きにつきての名譽あり。
かの貫之が歌はいかに。」

「げに、昔の貫之も、遙けき花の都より、

「未だ見もせぬ常陸の國に、

「名も櫻川、

「ありと聞きて、

「常よりも、春べになれば櫻川、春べになれば櫻川、波

常よりも春べになれば

櫻川

常よりも春べになれば櫻川波の花こそ
まなく寄すらめ(後撰集)櫻川といふ
所ありとききて(貫之)

貫之も
「之」を「雪」に掛けてゐる。

霞うながす
霞を流す(論)調子の都合で「う」とな
つたものであらう。促すではない。

信太の浮島
常陸の國稻敷郡にある。
あきさいる海上瀉を見わたせば霞に浮
ぶ信太の浮島(歌林)

の花こそ間なく寄すらめと詠みたれば、花の雪も貫之も、古
き名のみ残る世の、櫻川、瀬々の白波繁ければ、霞うながす
信太の浮島の、浮かめく水の花、げに面白き河瀬かな、げ
に面白き河瀬かな。

ワキ「いかに申し候。此の物狂は面白う狂ふと仰せ候が、け
ふは何とて狂ひ候はぬぞ。」

ワキツレ「さん候。狂はするやうが候。櫻川に花の散ると申し
候へば狂ひ候程に、狂はせて御目にかけうずるにて候。」

ワキ「急いで御狂はせ候へ。」

ワキツレ「心得申し候。あら笑止や。俄に山嵐のして、櫻川
に花の散り候よ。」

シテ「よしなき事を夕山風の、奥なる花を誘ふごさめれ。流
れぬ先きに花すくはん。」

シテ「いそめるめれ」の約略。

ワキ「げにく見れば山おろしの、木々の梢に吹き落ちて、

シテ「花の水嵩は白妙の、

ワキ「波かご見れば上より散る。」

シテ「櫻か、

ワキ「雪か、

シテ「波か、

ワキ「花かご、

シテ「浮き立つ雲の、

ワキ「河風に、

次第「散ればぞ波も櫻川、散ればぞ波も櫻川、流る、花をす
くはん。」

シテ「花の下に歸らん事を忘れ水の、
地「雪を受けたる花の袖。」

花の下に歸らん事を
花下忘歸因美景樽前勸醉是春風。
(和漢朗詠集、白居易)
忘れ水

野中などを絶え絶えに流れてゐて、人に知られぬ水。こゝは「忘れ」と水とを、別々に上下の句につけていうたの水落花落ちて

通解に「水ながれと云ふべきを、節の都合にて斯く誇ふなり。文としては好まじからず。此の文字以下鶴かへらすまでは詩句なるべし。」

岸花紅に
山花開けて
山花開けて錦、澗水湛如藍。(碧巖録)

一樹の蔭一河の流れも他生の縁。佛語も同じ木蔭に宿り、同じ河の流れを汲むも、昔前世の縁であるといふ意

所から。場處のためなること。所が所なるによつてであること。ところがらに同じい。

他生の縁
「他生は今生に對す。今生以外、諸の世界に生るゝを概稱していふ。而して、他生に生れ出でたる際に結びし因縁を他生の縁といふ。(佛)

年を経て
年を経て花の鏡となる水は散りかゝるを雲るといふらむ(古今集、伊勢)

散りぬれば
散りぬればのちば芥になる花を思ひ知

シテ『それ水落花落ちて、春こしなへにあり。』

地『月凄しく風高うして、鶴かへらす。』

サシ『岸花紅に水を照し、洞樹翠に風を含む。』

地『山花開けて錦に似たり。澗水湛へて藍の如し。』

シテ『面白や。思はずこゝにうかれ來て、』

地『名も懐しみ櫻川の、一樹の蔭一河の流れ、汲みて知る名も所から、あひにあひなば櫻子の、これ又他生の縁なるべし。』
ケセにや年を経て、花の鏡なる水は、散りかゝるをや、雲るこ云ふらん。まこと散りぬれば、後は芥になる花と、思ひ知る身もさていかに、われも夢なるを、花のみこ見るぞはかなき。されば梢より、あだに散りぬる花なれば、落ちても水のあはれこは、いさ白波の花にのみ、馴れしも今は先き立たぬ、悔いの八千度白千鳥、花に馴れゆくあだし身は、は

らすも感ふ蝶かな(古今集、僧正通昭)

梢よりあだに散りぬる
枝よりあだに散りぬる(古今集、菅野)

ても水の泡とこそなれ(古今集、菅野)

高世)但し「泡」と「哀れ」とは假名が違つてゐる。

先き立たぬ
先き立たぬ悔いの八千度悲しきは流る水(古今集、閑院)

百千鳥
百千鳥花に馴れゆくあだし身ははかなき程に羨まれぬ(古今六帖)

霞を憐み
霞を憐み露を悲ぶ心(言葉多きさま)

常陸帯の
常陸帯の道のはてなる常陸帯のかごとば

東路の道のはてなる常陸帯のかごとば(新古今集、讀)

人知らず(昔常陸の國の鹿島の神の祭)

名を記して、神前に供へ、社人が結び合せて頭つさまによつて、婿を卜定したといふ故事が奥儀抄に出てゐる。その

帯を常陸帯といふ。さて、この帯が、悪縁ならば離れ／＼に結ばれ、良縁ならば、掛帯のやうに結びつながらるのであるが、男女は、それを肩にかけて歸るから「浪かけて」といひ、浪をわが身にかけることにいひかけたのである。尙「かごとばかり」は云ひわけほどにか、しるしまでにかいふ義。又常陸

かなき程に羨まれて、霞を憐み、露を悲める心なり。

シテ『さるにても、名にのみ聞きてはるばるこ、』

地『思ひ渡りし櫻川の、浪かけて常陸帯の、かごとばかりに散る花を、あだになさじこ水をせき、雪を湛へて浮浪の、』

花の柵かけまくも、忝しやこれこても、木華開耶姫の、御神

木の花なれば、風もよぎて吹き、水も影を濁すなご、袂をひ

だし、裳裾をしをらかして、花によるべの水せきこめて、櫻

川になさうよ。

シテ『あたら櫻の、』

地『あたら櫻の、こがは散るぞ怨みなる。花もうし、風も

つらし。散ればぞ誘ふ。』

シテ『誘へばぞ散る花葛。』

地『かけてのみ眺めしは、』

帯のかごと」とつづけた事については、袖中抄に「帯にはかごと云ふもの有れば、かごと云はん料に、常陸帯といへるなり」とある。かごと(鉸具)は、革帯の端にあつて帯を締めるのに用ひる金屬製の鉤である。

花の櫛し

櫻散る水の面にはせきとむる花の櫛掛くべかりけり(千載集、能因法師)花の櫛は、水に散つて一面にちらばつてゐる花をせきとめる櫛をいふ。かけまくもば上下の語に掛る。

風もよきて

春風は花のあたりをよぎて吹け心づからやうつらふと見む(古今集、藤原興風)よるべの水

神社の庭前の瓶に貯へた水。よるは、神の遷る水であると顯昭は云つてゐる。あたら櫻の

花見んと群れつゝ人の來るのみぞあたは櫻のとがにはありける(西行法師)花もうし

花もうし嵐もつらし諸共に散ればぞ誘ふ誘へばぞ散る(雪玉集)

シテ『なほ青柳の絲櫻。』

地『霞の間には、』

シテ『樺櫻。』

地『雲こ見しは、』

シテ『三吉野の、』

地『三吉野の、三吉野の川淀瀧つ波の、花をすくはば、若し國栖魚やかゝらまし。又は櫻魚と聞くもなつかしや。いづれも白砂の、花も櫻も、雪も波も皆がらに、すくひ集め持ちたれども、これは木々の花、まことは我が尋ぬる、櫻ぞ戀しき、我が櫻子ぞ戀しき。ロッキイかにやいかに狂人の、言の葉聞けば不思議やな。もしも筑紫の人やらん。』

シテ『今までは、誰ともいさや不知火の、筑紫人かこのたまふは、何のお爲に問ひ給ふ。』

花はな葛がら

時節の花を葛に貫いて、挿頭にするも

霞の間には「霞の間より面白き櫻の咲き亂れたるを」(源氏物語、野分)雲と見しは

「春のあした吉野山の櫻は、人麿が心には雲かとのみなむおぼえける。」(古今集序)

國栖魚くわすいぎ

帖の異名。古へ、大和の國吉野郡國栖魚の名産であつたからいふ。

櫻魚うづめの名産であつたからいふ。

皆がらに。悉く。残らず。

不知火しらびの枕詞「知らぬ」は掛詞。

こは子なりけり
今鏡に「菩提樹院といふ寺にある僧房の池の蓮、鳥の子を産みけりけるを、籠に入れて飼ひけるに、鶯の子時々入りて、物くめなどしければ、鶯の子なりけりと知りければ、下は大きにて、親にも似ざりければ、怪しく思ひけるほどに、子のやうく大人しくなりて、時鳥と鳴きければ、昔よりいひ傳へたる古き事となりと思ひ、あはる人のよめる。親の親ぞ今はゆかし

地『何をか今は包むべき。親子の契朽ちもせぬ、花櫻子ぞ御覽せよ。』

シテ『櫻子と、櫻と聞けば夢かこ見も分かず、いづれ我が子なるらん。』

地『二年の日數程ふりて、別れも遠き親と子の、』

シテ『もこの姿は變れども、』

地『さすが見なれし面だてを、』

シテ『よくく見れば、』

地『櫻子の、花のかほばせの、こは子なりけり鶯の、あふ時も鳴く音こそ嬉しき涙なりけれ。キリかくて伴なひ立ち歸り、かくて伴なひ立ち歸り、母をも助け様變へて、佛果の縁となりけり。二世安樂の縁深き、親子の道ぞありがたき、親子の道ぞありがたき。』

佛果 時鳥はや鶯の子は子なりけり」
 佛果 佛となまへき諸の因を修して得たる
 二世安樂 (佛)
 二世とは、現在世と未來世をいふ。
 佛の辭林に「或は、わが受する人と、
 現在世に未來世をかけて離れざらん
 ことを神佛に祈ることを、二世の願と
 いふことあり。この願に應じて得られ
 たる果報に、所謂二世安樂なり。」



狂言針立雷

謠曲と狂言との文

謠曲の文は、室町時代の文學に異彩を放つてゐる。其の構造からいへば、古歌や佛典や經書などの中から、五七又は七五の句を、巧に採つて、句尾を變化して、之を次の句に連接せしめてゐるが、文法上には少しも頓著しないで、唯だ語句の縁を以つて連接してゐる。従つて意の上の聯絡には重きをおいてゐないのである。狂言は、能樂の貴族的で、嚴格なのに對して、平民的で滑稽である。多くは無邪氣な失策談であるが、その賞すべきところは、古樸で、品位を存してゐる點にある。狂言の文は、當時(室町時代)の口語を以つて記し、全文、悉く對話から成つてゐるから、この點は、謠曲に比して、一層劇詩的性質を有し、且つ、語學方面に資するところが少なくないのである。

狂言三種

井 碓

解題 盲者二人。勾當は弟子の菊都に負はれて河を渡らうとする。折柄來かゝつた狡猾な道行人は、勾當の先を越して、菊都に乗つて河を渡つて了ふ。あとから頻りに、勾當が呼ぶので、菊都は誘りながら、再び戻つて、師を負うて渡る。師弟は、やがて酒を飲み始める。例の道行人は、側から首を延ばして失敬する。盲目の悲しさは第三者を認め得ない。遂に師弟の喧嘩となり、菊都は師を打つて逃げる。勾當はその跡を追ひ、例の「やるまいぞ〜」で退場する。
東海 膝栗毛の座頭の川渡りは、この狂言から取つたものである。
道中 井碓(どぶかつちり)の名は、本文中の「どんぶりかつちり」から出たのである。

人物 シテ 勾當

勾當 琵琶法師の官名。當道樂集に「檢校・別當・勾當・座頭の四官を十六階に別ち、以來師匠檢校より、其の門葉ゆるすべし」と詔ありて、永官旨を下し給ふ。」
座頭 こゝでは、按摩・鍼治をなし、又琵琶などを弾く盲人を、廣く指したのである。

小筒 さくす 竹の筒。昔酒を入れるに用ひたもの。

アド 道行人

シテ「これは邊土に住居致す勾當で御座る。今日は都に、座頭の寄合御座る程に、参らうと存ずる。先づ菊都を呼出して申附けよう。やい、菊都あるかやい。」

菊 「はあ。」

シテ「居たか。」

菊 「御前に居りまする。」

シテ「汝を呼出す事、別なることでもない。今日は都に座頭の寄合があつて、某も行く程に、供をせい。」

菊 「畏つて御座る。」

シテ「路次の慰みにする程に、小筒を用意せい。」

菊 「畏つて御座る。はあ、小筒を用意致しまして御座る。」

中々

いかにも。(謠曲・狂言などの詞)

平家 平家琵琶の略。琵琶に合わせて平家物語を語る。平曲ともいふ。

シテ「何ぢや。用意した。」

菊 「中々。」

シテ「それならば追つついて行かう。さあ、来い。」

菊 「参りまする。」

シテ「扱、世上で、某が平家をば何といふぞ。」

菊 「こなたの平家をば、世上で殊の外譽めまする。」

シテ「官をせねば、平家を語ることがならぬ程に、汝をも官をさせたい事ぢや。」

菊 「私も其の願ひで御座る。」

シテ「去りながら、近々には、下稽古をばしてさらせうぞ。」

菊 「それは近來忝い事で御座る。さて、こなたに、ちと願ひが御座る。」

シテ「それは又如何様なことぢや。」

つつと。はるか。

むざとした事
むやみなこと。うっかりしたこと。

旦那衆

檀那は、梵語「ダーナ」。布施と譯する。佛教辭林に「布は普、施は捨、または散なり。一切衆生を愛愍するが故に、一切のものを普く惠施するをいふ。」とあるが、ここでは、財物を施與する信者を、僧から呼ぶ語に用ひたのである。施主・檀家などの意。

菊 「私はこなたの平家を、しかと承つた事が御座らぬ。それにつき、爰許は、つつと人遠い處で御座るによつて、何卒一節語つて聞かせられようならば、有難う御座る。」

菊 「扱々、そちはむざとした事を云ふ。身共が平家は、語る處が定まつて居て、此の様な辻・山さうで語る平家ではないやい。」

菊 「其の事も存じて居りますが、あたりに人もなし。一つは路次のお慰みにもなりませう。又都へ上らせられて、旦那衆へ御出なされたならば、定めて御所望も御座りませう。さうあれば御稽古でも御座る程に、何卒、一節語つて聞かせられい。」

菊 「うん、これは尤もぢや。それならば語つて聞かせようが、あたりに人は無いか。」

菊 「いや、此の邊に人は御座らぬ。」

菊 「それならば語つて聞かせよう。よう聞け。」

菊 「畏つて御座る。」

菊 「抑も一の谷の合戦破れしかば、源平互に入り亂れ、懸る者は頤を切らるゝもあり。又逃ぐる者は、踵を斬らるゝもあり。何か忙はしき時の事なれば、踵を取つて頤につけ、頤を取つて踵につけたれば、生えうず事と、踵に髭がむくくゝと生えたるなり。又冬にもなれば、切れうず事と、頤に鞍がほかり／＼と切れたるなり。」

菊 「やんやん、さても／＼世上で響むるは、近頃尤もで御座る。お蔭で初めて承つて御座る。」

菊 「やい、菊都。」

菊 「何事で御座る。」

生えうず事
生えよう事。

やんやん、
寝めはやす聲。
近頃
大層甚だ。

渡り瀬
渡り得べき浅瀬。

一の松
安宅の頭註参照。(四五頁)

利根
利口。利發な天性。かしこき性質。

シテ「川へ出たと見えて瀬の音がする。」

菊「誠に瀬の音が致しまする。」

シテ「これは渡り瀬か知らぬ。磔を打つて見よ。」

菊「畏つて御座る。」

(このうちにアド出でて、一の松にて名乗る。)

アド「これは此の邊の者で御座る。今日は所用あつて川向ひへ参る。急いで参らうと存ずる。いや、見ればあれに、座頭が二人して、何やら致して居る。はあ、磔を打つて渡り瀬を見る。扱々利根な者で御座る。」

菊「ゑい／＼、やつこな。ごんぶりづぶ／＼／＼。」

シテ「おう、其の邊は深さうな。今少し下へ打て。」

菊「畏つて御座る。此の石が手頃な石ぢや。さらば打たう。ゑい、やつこな。ごんぶりかつちり。」

シテ「おう、其處が浅い。」

菊「誠に爰許が浅う御座る。」

シテ「さあ／＼、身ごもを負うて渡れ。」

菊「畏つては御座りますが、私一人でさへ渡り兼ねまするに、何とこなたを負うて渡らるゝもので御座るぞ。これは御免なされて下されい。」

シテ「爰な者は。汝を連るゝは何の爲ぢや。此の様な時の爲ではないか。是非ごも負うて渡れ。」

菊「それならば畏つて御座る。」

アド「これは好い處へ参つた。某が負はれて渡らう。」

(というて、アド菊都に負はるゝ。)

菊「きつとごらへて御座れ。渡りまするぞ。やつこな／＼。」

爰な
こゝなる。こゝに居る。

きつと
じつと。動かすにじつかと。

シテ「菊都めは何をして居る事ぢや知らぬ。」

菊「さあ〜、これへ下りさせられい。やつこな。」

シテ「やい〜、菊都〜、おのれは何をして居るぞ。」

菊「や、こなたは、早それへ御座つたか。」

シテ「それへ御座つたか云うて、おのれ一人渡ると云ふ事があるものか。」

菊「今の程負うて渡りましたに、それへ御座つた。」

シテ「さあ〜、早う負うて渡れ。」

菊「只今それへ参りまする。」

シテ「扱々憎い奴の。一人渡るといふ事があるものか。」

菊「さあ〜、今度こそ、急度負はれさせられい。」

シテ「心得た。」

菊「渡りまするぞや。」

シテ「早う渡りおろ。」

菊「やつこな〜、あ、今度はちと深うなつて御座る。」

シテ「あ、其の邊は深い。下を渡れ。」

菊「心得ました。やつこな、あ、餘程深う御座る。」

シテ「扱々苦々しい。下を渡れといふに。」

菊「やつこな。あ、悲しや〜。」

シテ「これは如何な事、一と絞りになつた。扱々憎い奴の。

己れ一人渡る時は、浅い處を渡つて、身ごもを川へはめた。

耳へも水が入る。」

菊「扱々こなたはむざとされた。最前の程負うて渡りました

に、意地の悪い事をなさるゝによつて、私まで一と絞りにな

りました。」

シテ「又其のつれなごをいふ。殊の外寒うなつたが、小筒

如何な事
どうしたことが。(先方を尤めていふ
語。)

つれなご
強情なこと。情愛の無いこと。

は流しはせぬか。」

菊 「いや、小筒は流しませぬ。」

シテ 「それならばついでにお願い。」

菊 「畏つて御座る。」

(此の内、アド、一の松にて笑うて、)

アド 「見れば小筒を飲むさうな。さらば調儀致さう。」

(と云うて、さし足して、扇出して、)

アド 「扱もく好い酒ぢや。」

菊 「ごふくく。」

シテ 「おう、丁度あるさうな。」

菊 「誠に丁度御座る。」

シテ 「是は如何な事、一水もない。」

菊 「今の程注ぎました。」

調儀

又調儀とも書く。何事をかまくらむ事。たくらむ事。扇出して扇を盃に擬して用ひる。

丁度

都合よく。具合よく。

シテ 「皆外へこぼれたものであらう。今度はこぼれぬやうにつげ。」

菊 「畏つて御座る。ごふくく。」

シテ 「おう、今度こそ、又丁度ありさうな。」

菊 「今度こそ、丁度ありさうに御座る。」

(又、アド差足して取る。)

シテ 「又一水もない。」

菊 「これは如何な事、今の程つぎました。」

シテ 「皆おのれが飲うたものであらう。」

菊 「何として私が飲むもので御座るぞ。こなたが飲隠しをなさるゝもので御座らう。」

シテ 「何しに飲隠しをするものぢや。」

菊 「でも、今の程つぎましたに、合點の行かぬ事で御座る。」

又つぎませう。」

シテ「さあ〜、早うつげ。」

菊「心得ました。とふ〜、ちよろ〜、はや御座らぬ。」

シテ「何ぢや。はや無い。」

菊「中々。」

シテ「扱々、おのれは憎い奴の。路次の慰みにせようと思つて持たせたのを、おのれ一人して飲み居つて、某には一水も飲ませぬ。おのれ何としてくれようぞ。」

菊「何しに私がたべるもので御座るぞ。こなたの飲み隠しをなさるゝもので御座らう。」

ノト「扱々、面白い事ぢや。ちと喧嘩をさせよう。」

(これより、堰杵の如く鼻を引き、耳を引き、打擲して、アト笑ひ悦うではいる。シテ腹を立て、菊都を取つて引廻し、打倒す。)

堰杵
堰、又はゆできに打ち並べる杵。

やるまいぞ
能・狂言で、追ひ掛ける時などにいふ語。運さぬぞ。行かしめぬぞ。

菊「師匠ぢやこいうて負けるものではない。」

(といて引き廻し、打倒して入る。)

シテ「やい〜、師匠を此の様にして、將來が好うあるまい。捕へてくれい。やるまいぞ〜。」

子盗人

解題 豪家に忍び入つた盗人。彼れは何品よりも、そこに寝てゐる嬰兒を愛し、我れを忘れてからかつてゐる内に、乳母に見附けられる。亭主は抜刀で通つたが、盗人は嬰兒を小楯に取つてゐるので切るにも切れぬ。その内に、盗人は隙を見て、嬰兒を置いて逃げる。主人は例の「やるまいぞ〜」で、跡を追ひながら退場する。

天真爛漫な嬰兒の前には、無頼漢も無頼漢でないといふ事が面白く諷刺されてゐる。

人物 シテ 盗人

乳母

アド 亭主

(始めに乳母、子を抱えて、)

乳「扱も〜、能う御寝なる御子様かな。さらば表の御座

中入

一度樂屋に入ること。

名譽のこれしや

評判の高い博徒。

鹿の角を揉む

博打をうつ事。博打に用ひる賽ば、多くは鹿の角で造るといふ。

繩に縛ふ程

度數の多きに喩へたのである。

家一跡

家全體。家にもとより、家財・家具悉皆。

世話

世間の言ひ草。ことわざ。

大有徳

大富豪。

殊ない

此の上ない。

子盗人

敷へ連れまして休ませませう。申し〜、爰に緩りと休ませられい。妾は勝手へ行つて、茶をたべて参りませう。」

(と云うて中入。)

シテ「名譽のこれしやで御座る。此の間、あたりの若い者と寄り合うて、鹿の角を揉む程に、揉む程に、繩に縛ふ程致いて御座れば、散々揉み損うて、家一跡は申すに及ばず、女どもが身のまはりまで打込うで御座るによつて、宿へ戻る事もならず、何とも致さうやうが御座らぬ。寔に、世話に申す如く、角力の果ては喧嘩になり、博打の果ては盗みを致すより外は無いと申すが、某も只今は、左様の手段ならでは、致さうやうが御座らぬ。それにつき、下の町に、誰殿と申して、大有徳な人が御座るが、殊ない道具好きで、不斷、道具が取り散いてあると申すによつて、今夜あれへ参り、何ぞ道具の

打返さう
ばくちを打つて、さきに負けた分を取
りかへさう。

本ほんのもの
ほんもの。其の道のくらうと。

葎垣よぎ
又、葎垣ともいふ。垣の一種、葎よぎで
造つたもの。杉丸太を建て、竹とけを胸縁
とした上に葎よぎを張つて、竹とけの押縁を
繩で結び附ける。兩側に葎よぎを張つて、
中に藪を入れたのもある。

一色二色も、案内なしに、そつと借つて参り、それを元手に
致し、何卒打返さうと存ずる。總じて斯様の事は、宵からつ
けたがよいと申すによつて、時分も好う御座る程に、先づ、
そろり／＼と参らうと存ずる。寔に斯様の事を致さば、後
には面白うなつて、本のものになるに申すが、私は、中々左様
の事では御座らぬ。参る程に、これで御座る。扱も／＼
用心きびしい體かな。これでは中々這入られまい。それ
／＼、先度裏道を通つたれば、まだ塀の手の合はぬ處があつ
た。さらば裏道へ参らう。何卒先度のまゝであらばよう御座
るが。さればこそ、此の葎垣一重ぢや。これを切り明くれ
ば、則ち表の座敷ぢや。この様な事があらうと存じて、鋸を用
意致した。さらば切りあげよう。ずか／＼／＼、ずか／＼
／＼、ずか／＼／＼、ずつかり。されば、これを引きめくら

だくめいて
だく／＼するやうで。動悸がするや
うで。
この分の
これぐらゐの。

とつて出よう
引つ返さう。
こはもの
恐しいこと。

子 登 人

う。 めり／＼、めり／＼。 鳴つたり／＼、した、
かな鳴りやうであつた。身ごもはうろたへた。人に聞かすま
いと思つて、我が耳を、ちやつと塞いだ。人は聞きつけぬか
知らぬ。誰も聞きつけぬと見えて静かな。さらばくゞらう。
ゑい／＼、やつこな。 はあ、しつけぬ事をすれば、胸がだ
くめいて氣味がわるい。 いや、又これに塀がある。この分
の塀は飛び越えて参らう。 やつこな。 さればこそ、これ
が表の座敷ぢや。先づ戸をあけて見よう。 さら／＼／＼。
(肝を潰して退きて、)
火がごもつてある。先づ落ち著いた。人が居るならば、其の
儘とつて出ようが、人は居らぬと見えた。だますかも知れぬ。
見ごゞけて参らう。 あゝ是れはこはものぢやが、
(拔足にて行き、覗き見て、)

風爐 茶の湯で、席上に置いて湯を沸す土製、又は鐵製の爐。形圓く、縁の一方を缺いて、風を入れるやうにしたもの。春夏の季に多く用ひる。

茶屋 茶屋釜の略。室町時代、筑前の國遠賀郡茶屋村から鑄出した釜。土佐光信・阿蘇丹などの手になつた繪模様もあつて、茶道家に尊重されてゐる。

高麗 高麗燒の略。朝鮮で焼いた陶器・磁器の稱。青高麗・白高麗などの種類がある。

取り合はぬ。比較にならぬ。

のう〜、嬉しや〜。誰も居らぬ。さら〜。扱も扱も、結構な普請かな。いや又、有徳人の普請は違つた物ぢや。隈から隈までも、手のこうだ好い普請ぢや。さればこそ、これにはや、色々道具が取散いてある。これは何ぢや。は、あ、茶の湯道具ぢや。風爐・釜・茶碗・茶入・扱も〜結構な道具ぢや。此の釜は、定めて葦屋であらう。又此の茶碗は、疑ひもない高麗であらう。扱又、此の茶入の姿・形のしをらしさ。これは、何を一色取つても、一かごの元手ぢや。は、あ、武具・馬具・扱も〜美々しい事かな。や、これに結構な小袖がある。これは、こちらの道具とは取り合はぬ。それはごもあれ、此の間、女ごもが機嫌が悪しう御座つた程に、さらば、これを取つていて、女ごもに遣はさうと存ずる。

(と云うて小袖を取り、子を見つけて)

吾御料 わこれう。親んで呼ぶ對稱の代名詞。男女に通じていふ。わこりよ。おまへ。

は、あ、これに子が寝させてある。これは定めて、誰殿の稚いで御座らうが、何として、此の様な人遠い所に寝させて置いたか知らぬ。定めて、乳母めが此の子をこれに寝させて、己れは勝手へ行つて雑談がな云うて居るで御座らう。や、目をほつちりさあいて、何ぢや、手を出してだかれよう。おう、抱きませう〜。さらば抱きませう。やつこな。扱も〜、こなたは好い子ぢや。總じて、下々の子は、知らぬ者を見ては、必ず泣くものぢやが、吾御料は、有徳人の子程あつて、此のむくつけな者を見て、よう御笑やるの。何ぞ藝は無いか。てうち〜。

(笑ひて)

もう無いか。かぶり〜。

(笑ふ)

扱々、其方は藝者ぢや。餘り聲高に云うたによつて、機嫌がそこねた。ちとすかしませう。ころころ〜。や、いとし子で御座るを、誰が又泣いた。颯が來るによ。泣くまいぞや泣くまいぞや。

(返して云ふ。)

さればこそ機嫌が直つた。某も子を持つて覚えが御座るが、見目の悪い子でさへ、親の身では可愛う御座るに、誰殿は果報な人ぢや。そなたのやうな好い子を持つて、さぞ嬉しう御座らう。總じて狐の子は頬白と云ふが、其方は誰殿によ。御似やつて好い子ぢや、好い器量ぢや。最早何も藝は無いか。や、何ぢや。合點〜。もう無いか。にぎ〜。

(笑うて、)

扱々藝者ぢや。あの餘念の無い顔は。ちとこそぐりませう。

頬白
頬の白いこと。顔の白いこと。

こそ〜。

(笑ふ。)

扱々よい機嫌ぢや。あ、餘り聲高に申すによつて、又ちと機嫌がそこねた。今度は肩車に乗せてすかしませう。

(子を肩に乗せて、)

はあ、いとし殿御を肩に乗せて、乗せて〜、御所へ参らう〜。

(さへつも返して云ふ。)

乳「最前和子様を、表の座敷に寝さしまして御座るが、よう御寝なるご見えて、御聲が致さぬ。参つて見ようと思ひます。

(と云うて、盗人を見附けて、)

申し、御座りまするか。」

本「何事ぢや。」

乳「表の御座敷へ盗人が入つて、御子様の御守りをしまする。」

本「心得た。」

(と云うて肩ぬぎ、太刀持ちて、)

やい、表の座敷へ盗人が入つた。此處は某が受取つた。

裏へも脊戸へも人をまはせ。出合へくく。」

シテ「これはいかな事、見附けられたさうな。」

(と云うて、子を脇座へ置いて、シテ柱の方へ逃ぐる。)

本「やい、おのれ憎い奴の。胴切にしてやらう。」

シテ「御座敷を見物に参りました。」

本「何の夜中に座敷を見物。から竹割にしてやらう。」

シテ「あゝ、申し、聊爾をなさるゝな。私は盗人でない

脇座

能舞臺の脇柱から、少し後方に當れる左の方。

シテ柱

能舞臺、橋懸から舞臺へ入る所の角の柱。仕手の所作の起點とも終點ともなること。

から竹割

幹竹を割るやうに眞直に切り割る事。

聊爾は薄竹の異名。

聊爾

席忽なること。

證據には、こなたの御大切の和子様を、乳母めが人遠い所へ寝さしまして、おのれは、これへやら雑談に参つて御座るによつて、乃ち御守りを致して居りました。」

本「何の子の守りをするものか。胴切にしてやらう。」

シテ「すれば、どうあつても切らせらるゝか。」

本「斬らいで何とする物ぢや。」

シテ「それならば、先づ此の子から斬らせられい。」

本「其の子をそこにおけ。」

シテ「さあ斬らせられい。」

本「置かざれば其の子どもに斬つてしまはう。」

(乳母悶えて、)

乳「あゝ、あぶない。先づ待たせられい。早う其の御子をおいて逃げて行け。」

(というて主へ留める。)

シテ「さあ、斬らせられい〜」。

(というて、段々廻りて、仕手柱のきはへ子を下し逃げてゐる。)

あゝ、許させられい〜」。

「憎い奴の。あの横著者。其の盗人を捕へてくれい。やるまいぞ〜」。

(というて追ひ入る。乳母は、後にて子を抱きあげ、)

「扱々、あぶない目にあはせられた程に、御壽命は長からう。いごをしのわ子様や。五百八十年七廻り迄も生き延びさせられよう。のう〜、嬉しや〜」。

(というて入る。)

針立雷

解題 簀醫者が都會でもてぬは世間の常。これもその御多分に洩れぬ一人。花洛をあとに江戸へ下る。折柄の雷雨。雷神は、雲間を踏み外して

下界に墜落。その時したゝか打つた腰の治療を、この醫師にたのむ。醫師は針を打つて平癒させる。雷はその藥禮として、八百年間旱損・

水損の災厄なからしめる事を約束して上天するといふ奇抜な作。

人物 シテ 雷

アト 醫師

「アト」藥種も持たぬ藪くすし〜、黄蘗や頼みなるらん。「こ
れは洛中に住居致す醫師で御座る。只今都には、典藥ノ頭の何
のこ申して、上手の醫師が數多御座るによつて、われら如き
の簀醫師には、誰も脈を見する者も御座らぬ程に、今は渡世

藥種も持たぬ……らん
次第で落ふ。黄蘗は芸香料、黄蘗屬の
落葉喬木で、我が國、各地の山地に自
生する。黄色なる内皮は染料及び藥用
とし、材は器具に製し、果實は又藥用
となる。
典藥ノ頭
典藥寮の長官。くすりのかみ。

針立雷

いかな事
井礫の頭註参照。(八三頁)

一遍廻
舞臺を一周して。
臨座
子、盗人の頭註参照。(九六頁)

を送らうやうがなうて、迷惑致す事で御座る。それにつき承れば、あづまには醫師が少いと申すによつて、これよりあづまへ下り、一と稼ぎ稼いで見ようぞ存ずる。先づ、そろりそろりと参らう。寔に、住み馴れた花の都をふりすて、他國へ参ると申すは、本意には御座らねども、これも浮世の習ひなれば、是非もない事で御座る。又仕合せを致いたならば、都へ上らうぞ存ずる。いや、参る程に、これは渺々とした廣い野へ出たが、これは何と云ふ處ぢや知らぬ。これはいかな事、俄に空が曇つて神鳴が致す。このやうな處に永居は無用。たゞ急いで、里近くへ参らうぞ存ずる。」

シテ「びかり〜、ぐわらり〜。」
アト「あゝ、桑原〜。」

(一遍廻りて臨座へかゝむ。)

シテ「びかり〜、ぐわらり〜、ぐわら〜ごう。あゝ、痛や〜〜。今日は心面白う鳴り渡つたれば、ふと雲間を踏み外いて、此の野へ落ちて、したゝかに腰の骨を打つた。いや、これに何物やら居る。やい〜、そこな奴。」

アト「はあ。」

シテ「おのれは何者ぢや。」

アト「私は、いしで御座る。」

シテ「石がものを云ふものか。」

アト「いや、醫師と申して、人間の病ひを直す者で御座る。」

シテ「何ぢや。醫師と云うて、人間の病ひを直す者ぢや。」

アト「中々。」

シテ「身ごもは雷ぢやいやい。」

アト「はあ。」

中々
井礫の頭註参照。(七七頁)

シテ「今日は心面白く鳴り廻つたれば、ふと雲間を踏外いて、此所へ落ちて、腰の骨をしたゝかに打つた。さりながら、何ぞ取りつく物があらば、やがて天上するが、折節何もない所で、今は天上せう様がない。汝誠の醫師ならば、身ごもが腰を直いてくれい。」

アト「畏つては御座りますが、私も、今迄色々の療治を致して御座れども、お雷の御療治は遂に致いた事が御座らぬ。これは御免なされて下されい。」

シテ「おのれは憎い奴の。人間の雷の云うて、別に違ふ事はあるまい。おのれ療治せずば引き裂いてのけよう。」

アト「はあ、眞平助けて下されい。御療治を致しませう。」

シテ「何ぢや、療治をせよう云ふか。」

アト「左様で御座る。」

シテ「それならば命を助けてやらう程に、早う直いてくれい。」

アト「畏つて御座る。先づ御脈をうかゞひませう。」

シテ「如何様にしてなりとも直いてくれい。」

アト「心得ました。」

(と云うて頭脈を見る。)

シテ「これは何とする。」

アト「はあ、人間の脈は、左右の手で見ますが、お雷の脈は頭脈ご申して、頭で見ます。」

シテ「それ程知つて居るではないか。」

アト「はあ。」

シテ「扱、何さあるぞ。」

アト「お雷には、御持病に中風があるご見えます。」

シテ「扱々、汝はいかい上手ぢや。中々持病に中風があるはやい。」

アト「左様で御座らう。宿許で御座らば、御薬を上げませうが、こゝもごは途中で御座るによつて、御針を致しませう。」

シテ「針ごは。」

アト「これで御座る。」

シテ「それを何とするぞ。」

アト「これを痛所に打込みまする。」

シテ「茲な者は、何ごそれがたてらるゝものぢや。」

アト「これはいかな事。人間でさへたてまするものを、お雷のたてさせられぬご申す事があるもので御座るか。」

シテ「何ぢや、人間が立てる。」

アト「中々。」

茲な者は
こんな者は。

シテ「よい〜、人間のたてるものならば身ごもゝたてよう程にうつてくれい。」

アト「畏つて御座る。先づ横にならせられい。」

シテ「心得た。」

アト「此の邊で御座るか。」

シテ「おう、其の邊ぢや。」

アト「只今うちまする程に、動かせらるゝな。」

シテ「動くことではない。」

アト「はつし〜〜。」

シテ「あゝいた。」

アト「申し、其の様に動かさせられてはなりませぬ程に、動かぬ様になされい。」

シテ「心得た。痛まぬ様に打て。」

アト「畏つて御座る。はつし。」

シテ「あ痛。」

アト「はつし。」

シテ「あ痛。」

アト「はつし〜〜。」

シテ「あ痛〜〜、早う取つてくれい。」

アト「只今取りまする。何さよう御座るか。」

シテ「ふん、何さやら、こちらの方は餘程快う覺ゆる。今度

はこちらへも打つてくれい。」

アト「畏つて御座る。」

シテ「必ず痛まぬやうに打て。」

アト「今の様に動かせられては、針が打たれませぬ程に、動かぬ様になされて下されい。」

シテ「心得た。」

アト「此の邊で御座るか。」

シテ「おう、其の邊ぢや。」

アト「今打ちまする。」

シテ「心得た。」

アト「はつし。」

シテ「あ痛。」

アト「これは如何な事、其の様に動かせらるゝな。」

シテ「痛まぬやうに打て。」

アト「心得ました。はつし。」

シテ「あ、痛。」

アト「はつし。」

シテ「あいた。」

アト「はつし〜〜〜」

シテ「あいた〜〜〜、早う取つてくれい。」

アト「畏つて御座る。はあ、取りまして御座る。」

シテ「何ご、取つたか。」

アト「中々、取りました。」

シテ「それならば起きて見よう。やつこな。はあ、一段と快うなつた。迎もの事に、立つて見よう。」

アト「それがよう御座らう。」

シテ「は、あ、すきと快うなつた。もはやすぐに天上せよう。」

アト「あ、先づ待たせられい。」

シテ「何事ぢや。」

アト「薬禮を下されい。」

すきと
すつかり。

シテ「薬禮ごは。」

アト「されば其の事で御座る。人間の病も療治致せば、分限に應じて、それ〜に禮を致しまする。こなたも禮をして天上なされい。」

シテ「うん、これは尤もぢや。さりながら、今日は、ふと雲間を踏み外いて、こゝへ落ちたによつて、何も持ち合はせがない。汝が宿を云うておけ。重ねて落ちて取らせうぞ。」

アト「それは何ごも迷惑に御座る程に、何ぞ薬禮をおいて御座れ。」

シテ「それならば、この桴をやらう。」

アト「それは何の益にも立ちませぬもので御座る。」

シテ「それならば、此の太鼓をやらうか。」

アト「それもいらぬもので御座る。」

桴ハ
太鼓を撃ち鳴らす棒。ぶち。

シテ「今も云ふ通り、外には何も持ち合はせが無い。それにつき、人間といふものは、願望のあるものぢやが、汝は其の様な事はないか。」

アト「中々望みが御座りまする。」

シテ「それを云うて見よ。」

アト「雨風はこなたの御自由になりまするか。」

シテ「中々、雨風は身ごもがまゝになる事ぢや。」

アト「總じて人間は、當年は早損の、又は水損のを申して、薬禮をくれませぬ。われら如き者は、世の中へよう御座れば、渡世が致しよう御座る程に、早損・水損の無いやうに守つて下されい。」

シテ「これは尤もな望みぢや。それは如何程の間守つてござらせうぞ。」

アト「如何程と申す事は御座らぬ。いつ迄も世の中のよいやうにして下されい。」

シテ「いつ迄もと云うては限りがない。百年が間、早損・水損のないやうにしてござらせう。」

アト「百年と云うては餘り少なう御座る。一万年ばかりも守つて下されい。」

シテ「それも夥しい事ぢや。よい、某が料簡を以て、八百年が間、早損・水損のないやうにしてござらせうぞ。」

アト「これは忝う御座る。」

シテ「其の上、汝を典薬の頭にないて取らせうぞ。」

アト「尙々で御座る。」

シテ「約束の違はぬやうに、此の由を唄うて天上せう。それへ寄つて聞け。」

降りつ照いつ……上りけり
右詠
薬師やくし

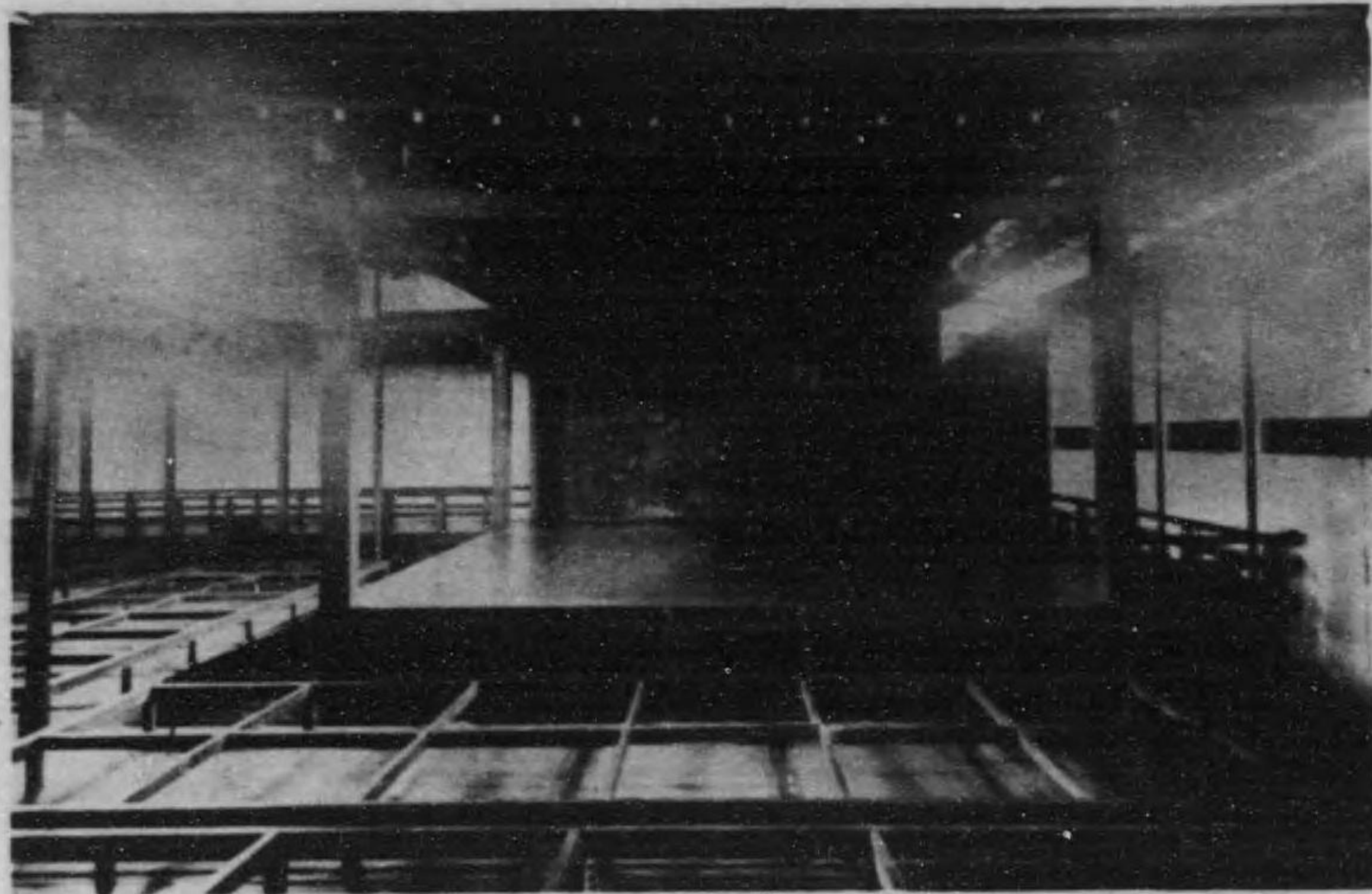
「薬師は薬師如来・薬師佛の略。具さ
には薬師瑠璃光如来(中略)また大醫
王佛とも稱せらる。須彌の東方にま
まして、その淨土をば、瑠璃光土と稱
す。(佛)
化現りびん
神佛などが、姿を變化して、此の世に
現れたもの。

アト「畏つて御座る。」

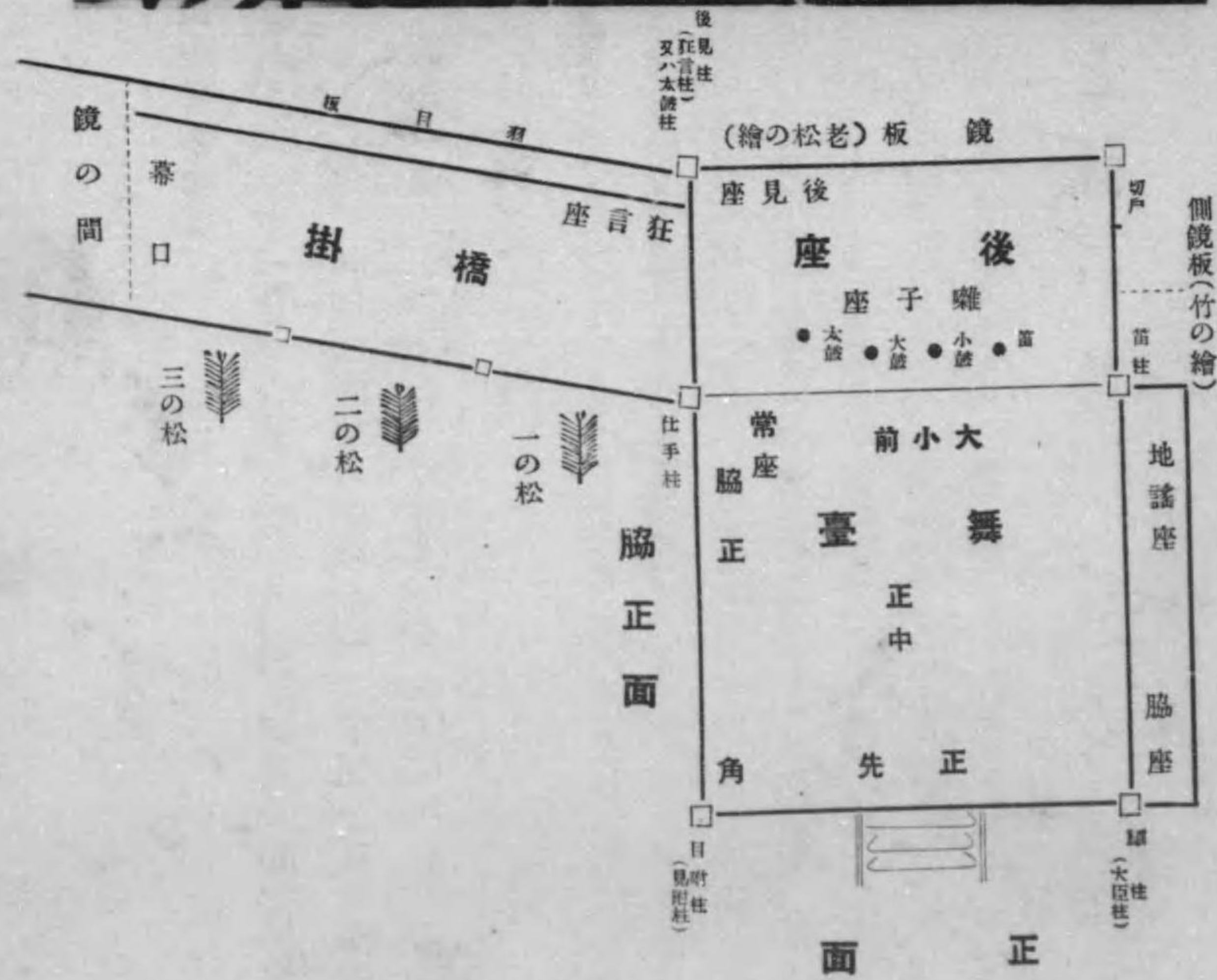
シテ「降りつ照いつ、降りつ照いつ、八百年が其の間、早損
水損もあるまじや。御身は薬師の化現かや。中風をなほすく
すしを、典薬の頭さひひ捨て、又雷は、上りけりく。」「び
かりく、ぐわらりくく。」「
アト「桑原くく。」「
(と云うて、耳を塞ぎ、あとより入る。)

謡曲と狂言 (終)

能舞臺圖



能舞臺各部の名稱



能舞臺各部の説明

能を演ずる場所を能舞臺といふ。正式では三間四方で、その後ろに横板の餘地を置いて、後見などは、皆こゝに居るのである。横板に續いて斜に樂屋に附いてゐる道を橋掛といひ、橋掛から樂屋に入る幕内の處を鏡の間といふ。こゝには、鏡が据ゑられてゐて、仕手が出る時に衣紋などをつくるふ處である。橋掛と鏡の間との隔てに幕があつて、役者が出入りする時は、これを上げ、すめば又下して置く。橋掛の欄干外には松が二本あつて、舞臺の方から數へて、それを一の松・二の松・三の松と呼ぶ。一の松を過ぎ右に折れて、舞臺に入る處の角の柱を仕手柱といふ。仕手が立ちどまつて歌ひ出し、又は所作をする處である。又その立つて歌ひ出す地點を名乘座といふ。仕手柱の反對の側、即ち、橋掛から舞臺に入る時に、左方に見える柱は、後見のすわる處であるから、後見柱ともいひ、間の著座する傍であるから狂言柱ともいひ、又太鼓の後であるから太鼓柱ともいふ。

舞臺先の右の角にある柱を目附柱とも見附柱ともいふ。仕手が常に、月と云つては見上げ、花の降ると云つては見上げる目當とする處である。これと並んだ左の方のを脇柱といふ。脇の著座する處である。脇は烏帽子・狩衣の大・臣脇を以て主とするから、これを大臣柱ともいふのである。仕手柱と並んで、笛吹のすわる處は、これを笛柱といふ。大小前といふのは、大鼓・小鼓の前といふのを略したので、乃ち大小の柏子方のすわる前の處をいふ。舞臺では、左右いづれにもよらず、丁度真中の處をいふのである。(丁)

附 録

神樂歌催馬樂

神 樂 歌

神樂は、我が國上古の歌舞で、神遊ともいひ、専ら神事に用ひられる。その起原は、天照大神が、天ノ石屋戸にお隠れになつた時に、天ノ宇受賣、命が、天ノ香山の天ノ日影を禰に繋けて、天ノ眞折を鬘とし、天ノ香山の小竹葉を手草に結うて、槽を伏せて、踏み轟かして、歌ひ舞うたのに基くのである。神武天皇の元年十一月に可美眞手、命の鎮魂祭を行はれた時、猿女、君が、神樂を掌つて以來、竟に永例となつた。清和天皇の朝に、始めて神樂歌の選定があり、醍醐天皇は神樂譜を勅定せられ、一條天皇の御代に、またその歌章が制定せられた。今に傳つてゐる三十七曲は、即ちこれであるといふ。

本末 神前に向つて、左方の樂人の一列を本座とし、右方の樂人の一列を末座とする。本末とあるは、兩座ともに誦ふ。外山、即ち奥山に對して、端にある山をいふ。まさ木のかづら、扶芳藤。衛矛科の植物で、我が國の山野に自生し、又觀賞用としても栽培せられる。考に「眞折は、常葉なる葛にて、十月と四月と古葉の紅づる、いとよき物也。」とめくれば、尋ねてくると。八十氏人、あまたの氏人。氏人は同じ氏族の人。圓居、圓く居ならぶこと。くるまき。團樂。神垣のある地につけていふ枕詞。神垣は神社の周りの垣、又境内。玉垣、瑞籬。み室、「御室。神殿のこと、むろは、もともりと同語にして、上古は、神靈は、多く籠りたる樹林の中に遷り給ひしによ

庭 燎

本末一首 外山には、み山には、霰降るらし。外山なる、まさ木のかづら色づきにけり、色づきにけり。

神

本末 榊葉の、香をかぐはしみ、ごめくれば、八十氏人ぞ、圓居せりける、やそ氏人ぞ、まごゐせりける。

本末 神垣のみ室の山の榊葉は、神のみ前に茂りあひにけり、茂りあひにけり。

杖

本末 此の杖は、いづこの杖ぞ、あめにます、豊岡姫の神の杖なり、神の杖なり。相坂を、けさ越えくれば、やま人の、千歳つけきて、くれし杖なり、くれし杖なり。

りて、そのを御室とい入り。(神)
 豊岡姫
 豊子氣姫に同じい。神祇辭典に「稚産
 靈神の御子なり。天下生民の食ひて生
 くべき食物を主宰し給ふ大靈神とし
 て、皇太神宮の御饗都として、皇室
 の崇奉殊に篤し」とある。「うけ」を
 か」というたのは曲調の音振に因つた
 のであるとい文にも云はれてゐる。
 相坂
 近江の國滋賀郡、蓬坂山。
 舎仙人
 昔時、天皇又は皇族がたに近侍して
 た雑掌。臣下も懸ばると、これを具し
 ともなかの座

腰にさかれる柄と受けて、篠の名所の
 柄岡にいひかけたのである。柄岡は山
 城の國乙訓郡にある。柄は、弓を射る
 時に左の臂に結びつける具。熊鹿な
 どにの革で製し、中に稻葉を充たし、外
 部に巴の字の象を畫き、革緒で結ぶ。圓
 形のもの、弦が臂に觸れるのを防ぎ、圓
 併せて、弦が臂に觸れるのを防ぎ、圓
 示すために用ひられる。威容を
 りるがために用ひられる。威容を
 刀銀造りの目貫の装飾した太刀。目貫は、
 刀銀の柄を抜けないやうにする爲に、

此の篠は、いづこの篠ぞ、舎人らが、腰にさがれる、ごも
 をかの篠、柄岡の篠。
 篠わけば、袖こそやれめ、利根川の、石は踏むごも、いざ
 川原より、いざかはらより。
 劔

しろがねの、目貫の太刀を、さげはきて、奈良の都を、ね
 るはたが子ぞ、ねるは誰が子ぞ。
 いそのかみ、ふるやをよこの、太刀もがな。くみのをしで
 て、宮路かよはん、宮路通はん。
 前張

さいばりに、ころもは染めん雨降れど、雨ふれど。
 雨ふれど、うつろひがたし、深く染めてば、深くそめてば。

柄の中部から、刀の中身に掛けて貫い
 た金具。古くは、間塞ともいうて、頭
 と針とを作り付けたのであるが、頭
 後世のは、別に分けて、頭を目貫、ま
 た空目貫と稱し、金銀の装飾などを施
 し、釘を目釘と云ふやうになつた。
 たが子ぞ
 「誰れぞ」といふに同じい。こは、そ
 の容儀のすぐれたのをほめていうたの
 である。
 いそのかみふるやおとこ
 石上は大和の國の地名で、布留は此
 の中にあるから「ふる」の語にかゝる枕
 詞ともなつてゐる。布留は同國山邊郡
 にあるが、抄には「石上ふるやは、大
 和ノ國布留と云ふ所の名なり。そこに
 ある男子をいふべし。」
 くみのをしで
 太刀につけた組紐のさげ緒を結び垂れ
 て。
 さいばり
 初咲の萩をいふ。前萩。
 閑野
 入文に「こゝのしづやは地名か。また
 東國のなかにて、芦萱等の生ふる所
 をつといひ、低き地を下谷と云へるに
 合せ見れば、野澤の水づける地を云ふ
 にもあるべし。」
 富草
 稻の異名。

閑野
 しづやのこすげ、かまもて刈らば、おひんや、おひんやこ
 ずげ。
 あめなる雲雀、よりこやひばり、ごみくさ、富草もちて。
 総角
 あげまきを、わさ田にやりてや、そをもふご、そをもふご、
 そをもふご、そをもふご、そをもふご。
 そをもふご、なにもせずして、春日すら、春日すら、春日
 すら、春日すら、春日すら。
 早歌
 や、いづれども、こうごまり。
 や、かの崎越えて。
 や、み山のこつら。

總角あじまき 古へ、男兒の髪かみの結び方の名。左右に分け揚あげ巻まきて、雙角ふたつのつばの如く兩鬢かみを結んだもの。こゝはその年頃(十五六)の男兒おとこをいふ。

早稲わせの稻いねを作る田。

なにもせずして氣いきがかりで、物ものの手てにつかぬさまをいふ。

早歌はやうた 神樂歌かみかきの一種。音節おとずの促進すすな歌曲。

何れなにのところところに留とどまるのか。やはうたひ出す拍子うたひ。

小蔓こつづら。青蔓あおづらの類。

とろんと取とらんと。いとばた。甚おと將しやうだ。

あかざり。あかざり。輝あかり。しり來しんぞ。後あより來あんぞ。

や、くれく、小葛。

や、鷲たづなの頸くぼころんこ。

や、いごはた長ながうて。

や、あかざり踏ふむな、しりなる子。

や、われも目は有あり、さきなる子。

や、舍人しやにんこんぞ、しり來しんぞ。

や、われも來きんぞ、しりこんぞ。

や、あちの山やま、せ山。

や、脊山せやまのあちの脊。

や、このゑの御門ごもんに巾子きんしおといつ。

や、髪かみの根ねのなれば。

や、をみなごのざえは。

や、霜月しもづき・師走しそのかきこぼり。

春山

古へ、女めから兄あい、夫う、又は弟あなど、すべて男おとこを親おやしんで呼よんだ語。

このゑの御門ごもんに近衛みかどの御門ごもんは陽明門やうめいもん。

巾子きんしおといつ 冠かんむりの後のち頂たかに當ある處ところに高く立たつてゐるもの。髻むすをこの中なかに入いれる。古製ふるしの冠かんむりは額かみと巾子きんしとを別わかに作つくつて、巾子きんしを額かみにさし込こむやうに出來きたのであつた。おといつは落おつたの意い。

藝能げい 藝げい能に 考こうに「こは、稻いねを納なむる時とき、其そののかきこぼれたる粒つぶを、女兒めどももの財たからとするを云いふ也なり云々」

あふりど 風かぜに煽あられた戸かど。

ひばりと ひゞが入いつた戸かど。割われた戸かど。裂やけた戸かど。

そりあげん 仰あげあげよう。ゆすりて高たかうあげよう。

朝倉あさくらやきのまろどのに

朝倉あさくらや、きのまろごのにや、わがをれば、わが居いれば、わがをれば、なのりをしつ、や、ゆくはたが子こぞ、行く人ひとや誰たれれ。

朝倉や木の丸どのに、わが居れば名の
りなすつ、ゆくはたが子ぞ、(新古今集
天智天皇御製)朝倉宮跡は、筑前の國
朝倉郡にある。難風土記に「齊明天皇
七年、新羅を打ち、百濟を救はんが爲
め、天皇みづから筑紫に下り、此所に
行宮をたて、住玉ふ。削らざる木の丸
にて、屏作りせさせ給ひし故に、木丸
殿共云。其行宮の址、須川村の畑の中
に有。」

其、駒

その駒ぞや、われに、われに草こふ、草はごりかはん。
く
つわごり、草はごりかはんや、水はごりかはんや。

催 馬 樂

催馬樂は、平安朝の初めに、里俗の間に行はれた一種の歌謡であるが、
後、唐樂が大に流行するやうになつてから、其の音調により、其の時代
の好尚に適するやうに體を定めて謠ひ、遂には、高貴の人の用ひる樂曲
となつたのである。酒宴の餘興などには必ず催馬樂歌を謠うたことが源
氏物語などに見えてゐる。催馬樂といふ名義については諸説あるが、こ
ゝには略しておく。橘守部大人の催馬樂譜入文には、律二十五首、呂卅
六首が載せられてゐる。

我 駒

いでわが駒、早く行きこせ、まつち山。あはれ、まつち山は
れ。まつち山、待つらん人を、ゆきてはやあはれ、行きて
はや見ん。

飛 鳥 井

催 馬 樂

いでわが駒早く行きこせ、まつち山待つらん
妹を待たば、早く見む。萬葉集、讀人
不知。こせは、希望をあらはす助詞
(古格)。「あはれ」は、考に「た」拍助詞
に添へたる辭にて、意なし。とあるが、
入文には「今按に、拍子詞」とあるが、
更なる意なきにあらす。次々にも、其の
句の意なきにあらす。多かり。こせ、鳴呼
待つらん妹早く行き見て見むとかけ呼

「聞くべし」とある。はれは「あはれ」の「あ」を略したのである。また、大和の國宇智郡にある。眞土山、又は亦打山も書く。飛鳥井、大和國飛鳥神社の前にある井。神武天皇の、馬に水飲ませ給ひし蹟跡といふ。また古歌に詠める飛鳥井は、山城國東の京二條萬里小路にありしものといふ。(言泉)

おけ 神樂・催馬樂歌の拍子の詞。入文には「阿々哀加之の約れる言にもやあらん」とあり、わが師、故黒川眞頼博士は「おけは行への意で、今日の口語のやれといふのに當る」と講ぜられた。かげもよし 樹蔭も涼しうて宿るによい。飲み水。飲料水。古へ、飲み水をもる器を笠といふたが、それから轉じた語。「み」は接頭辭。まくさ 稱。牛馬の飼料にする草。あややぎを 梅の花笠(古今集、神遊の歌)片絲は縫ひ合せぬ絲。梅の花笠を笠に見たて、いふ語。しほがひ

飛鳥井に、あすかゝるに、宿りはすべし。おけ、かげもよし、かげもよし。みもひもさむし。みまくさもよし。

青柳

あをやぎを、青柳を、片絲に縫りてや、おけや、鶯の、おけや。

鶯の、縫ふといふ笠は、おけや、梅の花笠や。

伊勢海

いせの海の、いせの海の、清き渚の、しほがひに、なのりそや摘まん、貝や拾はん、玉や拾はん。

老鼠

西寺の、おい鼠、わか鼠、おんもつんづ、袈裟つんづ、けさつんづ。法師に申さん、師に申せ、法師に申さん、師に申せ。

紀伊國

きのくにの、紀の國のや、しら、の濱に、ましら、の濱に、おりあるかもめ、はれ、その玉もてこ。風しも吹いたれば、なごりしも立てれば、みなぞこきりて、はれ、その玉見えず。

酒 飲

酒をたうべて、たべゑうて、たふこりんぞや。まうでくる、なよろほひそ。まうでくる、たんな、たんな、たりや、らん、たりちりら。

無力蝦

力なきかへる、ちからなきかへる。骨なきみ、ず、ほねなき蚯蚓。

奥山

しほがひ 潮間、即ち潮の干てゐる間。なのりそ ほんだばら(馬尾深の異名)。じんめさうばまも。西寺 抄に「西寺は、むかし東寺に對へて西寺とてあり。又いつくの寺にても、西文に「今按に、奈良にていはば西大寺を云ふべし」云々。おんもつんづ 御裳つかつ之意。裳は僧侶の腰につける衣。「つむ」は、かじる即ち向齒で噛む意。しららの濱 西牟婁郡にある。大日本地名辭書に「白良の濱は、瀬戸村より湯崎村に至る間にあり。此の濱の砂極めて白し。銀沙歩と名づく。」なごり 風が和いで後に、なほ暫し鎮まらぬ波。みなぞこきりて 水底露而の意。水の底がくもつて。酒 飲 さいけをたうべと訓む。たふこりんぞや 入文に「今按にたふ、懲りんぞと云ふ下のたふを省いて、たふと懲りんぞとはいへる也」とある。又「たふと」

については、同書に「多き事を云ふ古語也。こゝも多くこりんと云ふ意也。今の俗に多き事をたんといふ。則ち此の言の音便也。こゝも一本には、音便にたんとこりんとあり。」

抄に「以下は皆笛の聲を表したるうたの節也」とある。入文に「今按に、上のたふと怒りんぞといへる縁に、たんな云々と云ふ笛の語をとり出でて、やがてその語の詞どもか酔人のよみばふ足の拍子にとれる氣取のをかしき也」とある。入文には「まうでくる其の足つきのをかしきよ。拍子をとらばたんな、たりや云々とあはせて見べきさまでよとなり。」と譯してある。

無ちからなき力ちから蝦えび

ちからなきかへると訓む。抄に「みすなばかへるが取りて喰ふなり。故に對していへるにや。」

老翁らうじゆん・ちぢ。

木流すと

木を切つて、河へ流さうとて。

木や木やと

木よ木よと云つて、木を寛めて。

附 録 (終)

奥山に木切るやをぢ、木をやはけんづる、ま木やはけんづる、木けんづるをぢ。

奥々山

おく山に、木流すと、木切るをぢ、木やま木やま、木をやはけんづる、眞木やはけんづる、木けんづるをぢ。

大正十五年一月廿五日印刷
大正十五年一月三十日發行

諸曲と狂言
定價 金壹圓叁拾錢

不 許
製 作

著 作 者 大 林 徳 太 郎
發 行 者 大 阪 市 天 王 寺 區 堂 ヶ 芝 町 百 八 番 地 藤 原 久 吉 郎
印 刷 所 大 阪 市 西 區 阿 波 座 二 番 町 一 番 地 日 本 印 刷 製 本 株 式 會 社
代 表 者 堀 越 幸

發 行 所 大 阪 市 天 王 寺 區 堂 ヶ 芝 町 百 八 番 地 櫻 園 書 院
取 次 販 賣 所 大 阪 市 東 區 北 久 太 郎 町 四 丁 目 會 社 柳 原 書 店
攝 管 大 阪 一 七 四 番 攝 管 大 阪 二 三 一 番

322
456

終

